未完のセルビアークロアチア協定

――「1939年８月26日協定」の経緯と問題――

材　木　和　雄

１　問題の背景

戦間期のユーゴスラヴィアで内政上の最大の不安定要因を構成したのはクロアチア問題であった。それは，この国の民族集団の中で二番目に人口が多いクロアチア人が自治権を求め，中央政府に対して政治的な離反を続けていたことであるが，この問題は遡れば建国時の経緯に起源があった。

南スラヴ人の国を意味するユーゴスラヴィアは，1918年12月に旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人国家とセルビア王国とが統一国家を宣言することによって歴史的な歩みを始めた。しかしその際，二つの地域の政治代表は，統一後の国家構造をどのようにするのかを取り決めることなく，統一国家の樹立を既成事実とすることを急いだ。このため，後に大きな問題が発生することになった。

旧オーストリア＝ハンガリー領側は，憲法の制定によって国家のあり方を最終的に決定するまでの間は，これまで認められていた各地方の自治権が維持されると期待し，それはセルビア政府も了解したと考えていた。したがって，彼らは，統一国家は少なくとも当分の間，単一国家ではあるが連邦制に近い国家形態をとるとは思い込んでいた。しかし，セルビア側はそのような了解をした覚えはなかった。これはそのとおりであり，実際に何の協定文書も存在しなかった。むしろ，セルビア側は，旧オーストリア＝ハンガリー領をセルビア王国の中に統合しようとする彼らの国家構想が暗黙の承認を得たと考えていた。国家形態をめぐる同床異夢は，当時の力関係によってセルビア側の主導権によって決着がつけられた。彼らは旧セルビア政府に権限が集中する行政機構をすばやく構築し，多数決によって1921年に憲法を制定し，君主制を前提とする中央集権的な単一制国家を確定した。

この中央集権制は，地域および民族間関係から見れば，旧セルビア王国とそのセルビア人が他地域と他民族に対して優越的な地位をもつ支配体制であった。第一次世界大戦中に連合国に属したセルビアは当初，旧オーストリア＝ハンガリー領を自らが解放した地域のように見なし，戦争中に払った多大の犠牲によってセルビアとセルビア人が様々な領域で優越権をもつことを正当化しようとした。しかし，旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人，とくにクロアチア人はこのような正当化を受け入れなかった。クロアチア人は旧オーストリア＝ハンガリー領の時代に認められていた自治権が奪われ，自分たちが二級市民的な取り扱いを受けるようになったことに大きな不満をもった。

この不満を吸収して大きな反政府勢力となったがクロアチア農民党である。政府は1918年12月の国家統合をセルビア議会に提出し，その承認を得た。しかし，クロアチア議会はこれを批准する機会を与えられなかった。ラディッチは，このことを根拠に統一国家はクロアチア人にとっては正当性を欠いていると主張した。クロアチア農民党は，国家制度については，クロアチアに国家主権を認めた連邦制国家への再編を求めて，セルビア人代表との民族間協定の締結を政治目標とした。

セルビアの支配層は当初，国家制度の面でクロアチア農民党の要求を認める意思は微塵ももたなかった。政権側の基本方針は強権的な弾圧か，そうでなければ利益供与による懐柔であり，クロアチア農民党の指導部を骨抜きにすることであった。クロアチア農民党は弾圧に屈して一度は政権に参加したが期待した成果が得られず，結局野党に戻った。これによって双方の不信感は増し，政府・与党とクロアチア農民党との抗争はかえって激化した。1927年６月には議会審議の最中に激昂したセルビア人議員がクロアチア人議員５人をピストルで殺傷するという前代未聞の事件が起こった。撃たれた議員の一人であったラディッチは二ヶ月後に死亡した。

クロアチアの野党議員は議会をボイコットし，ベオグラードを去った。彼らはセルビアの政党とは今後一切の交渉に応じないと宣言し，国王の直接関与による解決のみに期待をかけた。彼らは国王の行動を待った。ところが，このような態度は，彼らの意図に反し，独裁制の呼び水となった。殺傷事件後に独裁制の意向を示していた国王は慎重に準備を進め，機が熟したのを見て，憲法の停止と議会の解散を命令した。1929年１月６日のことである。まもなくすべての政党は解散され，国王独裁制が始まった。

国王アレクサンダルは個別の民族主義の表出を戒め，均質的で一体性をもった国民を作るため，ユーゴスラヴィア主義を人民に受容させようとした。国王は1929年10月，国名を「セルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人の王国」から「ユーゴスラヴィア王国」に変更した。その意図は個別の民族名を取り去り，単一国民国家にふさわしい国名にするためであった。同時に彼は国家を構成する33の県を９つの州に再編成した。その際，国王は，クロアチアやセルビアといった歴史的な地域が個別の民族主義や地方割拠主義の温床になり，国家と国民の統合を妨げているという理由から，これらの伝統的な地域単位を解体し，まったく別個の地域単位に作り替えた。

国王独裁制は当初議会政治が解決できなかった問題を解決すると宣伝したが，その政策のほとんどは人びとの失望や反発を招く結果に終わった。国土の９つの州への再編は中央集権制にはまったく手を付けない改革であったので，クロアチアの野党勢力からはまったく評価されなかった。国王が唱道したユーゴスラヴィア主義も，現実にはそれぞれの民族の伝統や自負心を踏みにじるものであったため，いずれの民族からも反発を招いただけであった。経済の安定と社会問題の解決を求めた人びとも期待を裏切られた。経済的な困難は世界的不況の影響であり，政権側の政策に直接の責任はなかったが，国民の不満は国王と政府に向けられた。

1930年代半ば，ユーゴスラヴィアは外交政策上の理由からもクロアチア人の政治的な離反は放置できないものとなった。しかし，彼らの政治代表であるクロアチア農民党と協定を成立させるためにはクロアチアに自治を承認することが必要であった。ところが，国王は根本的な解決策を提示できなかった。致命的な問題は，複合的な国家編成の必要性を国王が理解できなかったことである。国王が試みたことは，野党勢力を分断し，最小限の譲歩で個別に政権側に取り込むこむことだけであった。しかし，国王の苦況を野党側もよく承知していた。彼らは国王の足下をみて，容易に譲歩をしない姿勢を示した。国王と野党勢力との交渉は成果を見ないまま，1934年10月の国王の暗殺によって幕を閉じた。

未成年の後継国王に代わり，その権限を代行する地位に就いたパヴレ公はクロアチア人の政治的忠誠の確保に腐心し，最終的には彼らに自治権を承認する決意をした。1939年１月，彼はクロアチア農民党のマチェックと極秘に交渉を始めた。この路線は，1939年２月にドイツおよびイタリア政府が信頼していた実力宰相のストヤディノヴィッチを解任したことによって，後戻りできないものとなった。チェコスロヴァキ

アのように民族問題を枢軸国側につけこまれないようにするためには，クロアチア人との協定をぜひとも成立させる必要があったからである。パヴレは自分に忠実なツヴェトコヴィッチを政権の座に就け，マチェックとの協議に当たらせた。４ヶ月を越える交渉の結果，1939年８月26日に協定は成立し，クロアチア州という自治単位が創設された。クロアチア農民党は政権政党のユーゴスラヴィア急進連盟と連立内閣を構成し，マチェックは副首相の地位に就いた。

クロアチア州は人口，面積共に国家の３割を占めた。それは中央政府からほぼ独立した準国家的な区域であったが，残りの州は中央政府が直轄する行政単位であった。このため，ユーゴスラヴィアは国制上の地位が異なった二つの地域から構成される複合的な国家編成をとる国となった。しかし，これは国家構造再編の一段階であり，連立政府はさらに残りの地域を含めて全体的な国家の再編をおこなう予定であった。それが実現していれば，残りの地域にもいくつかの自治単位が形成され，ユーゴスラヴィアは連邦制国家に生まれ変わっていたはずであった。しかし，改革のプロセスは1941年４月に枢軸国軍の侵攻と国家の解体によって頓挫させられた。

1939年８月26日協定は実質的には最初のセルビアークロアチア協定であった。それはこの国の建国時に遡る行き違いを矯正しようとした点で非常に意義深い。しかし，改革のプロセスは１年半で強制終了を余儀なくされた。そのため，この協定がもつ内在的な問題点よりも，外部環境の問題点が注目されることが多い。たとえば，今日のクロアチアではこの協定について，マチェックの路線の勝利であり，クロアチアの民族プログラムに沿ったものと評価されるが，内部の緊張と外部の圧力が大きく，実現の条件を欠いていたと考えられている[1]。

その改革は短命に終わったために，ユーゴスラヴィアの歴史を扱った文献のほとんどは，1939年８月26日協定を簡単な記述ですませている。しかしながら，私見によれば，この協定自体が大きな欠陥をもち，諸民族の国家への紐帯を弱めて，ユーゴスラヴィアの解体を早めた。この協定は，セルビア人とクロアチア人の民族間の協定としては様々な側面で不完全なものであった。とくに大きな問題はマチェックとの交渉を担当したツヴェトコヴィッチがセルビア人を代表する人物とは見なされなかったことである。1918年12月の統一国家の宣言がクロアチア人にとって正当性をもたなかったのと同様に，1939年８月26日協定はセルビア人にとっては正当性をもつものとは考えられなかった。本稿はこの点を明らかにするため，８月26日協定に至る経過を検証し，その上でこの協定の問題点を指摘したい。

2　政府交渉をめぐるマチェックとセルビア野党の駆け引き

1939年２月にベオグラードではストヤディノヴィッチ首相の解任という政変があったため，マチェックとパヴレとの交渉は１月中旬以来中断していた。新首相のツヴェトコヴィッチも議会対策に忙殺されて，マチェックに接触する余裕がなかった。この間マチェックはパヴレに対し，議会の予算審議が終了するまで待つことを了承していた。

国際情勢に目を移せば，ちょうど国民議会が閉会になる二日前に残部チェコスロヴァキアの解体が完了し，同国はヨーロッパの地図から消えていた。チェコスロヴァキアはユーゴスラヴィアと同様にスラヴ人主導の国家であり，この国と似かよった事情を背景に第一次世界大戦後に誕生した多民族国家であった。同国はユーゴスラヴィアと同盟関係を結んでいた国であり，この国の人びとにとって非常に親近感のある国であった。それゆえ，彼らにとってチェコスロヴァキアの運命は他人事ではなかった。とくに同国の解体を円滑に進めるためにドイツがチェコ人とスロヴァキア人の対立を利用し，ス

ロヴァキアを独立国としたことは，ユーゴスラヴィアの政治指導者に不吉な未来を暗示させた。

国内外の状況を鑑み，最高指導者のパヴレ公はマチェックとの交渉の再開を急がなければならなかった。クロアチア農民党指導部も国内外の情勢は彼らの側に有利な方向性を提示していると判断し，この状況に乗じて同党の要求をぜひ実現させたいと考えていた。

パヴレは当初クロアチア農民党との協定を自らの手で成立させるつもりであり，この年の１月の段階では彼はマチェックと直接的に交渉をおこなっていた。しかし，彼はこの計画を変更し，首相のツヴェトコヴィッチを代理人として立てることにした。その一つの理由は，マチェックの老獪な交渉姿勢に彼が手を焼いていたことにあった[2]。しかし，より大きな理由は，この間にマチェックと直接交渉に入る準備作業をツヴェトコヴィッチが終えたと彼が判断したことであった。国民議会の会期中，政府は二度の声明を発表して新しい交渉方針を示し，同時に政治犯に恩赦を与えて，クロアチア農民党との話し合いの環境作りをおこなっていた。国民議会が閉会し，ツヴェトコヴィッチが議会に対する義務から解放されて自由に行動できる体になったことも重要な要因であった。

1939年３月半ば，パヴレはサヴァ州副知事のミハルジッチを通して，ツヴェトコヴィッチ首相を４月初めにザグレブに派遣するとマチェックに伝えた。しかし，マチェックは引き続きパヴレ自身と直接的に交渉をしたいと考えていた。それゆえ，マチェックはパヴレの態度を不満に思い，シュバシッチを通してこう伝えた。ツヴェトコヴィッチが国王の代理人としてではなく，セルビア人の代表として来るのであれば話し合いに応じることはできない。パヴレは最終的にはこれを了承し，ツヴェトコヴィッチを国王の代理人として派遣することを伝えた[3]。

パヴレとマチェックとが１月におこなった交渉は非公式のものであり，セルビアの野党連合には知らされていなかった。しかし，ツヴェトコヴィッチとの交渉を正式に受け入れるとなると，マチェックはこれをセルビアの野党連合に知らせないわけにはいかなかった。クロアチア農民党とセルビアの野党連合は1937年10月に協定を交わし，政治連合を結成していたからである。その際問題になるのは，この協定の中で，国家構造の再編問題を新しく選出された憲法制定議会の場で協議し，各民族代表の合意によって決着をつけると彼らが取り決めていたことである。クロアチア農民党と政府との直接交渉はこの野党間協定が想定する問題解決のプロセスとは大きくかけ離れたものであった。したがって，マチェックがツヴェトコヴィッチとの話し合いに入るためには，問題解決の方法の変更について何らかの形で野党連合側の了承を取り付ける必要があった。

マチェックはクロアチア農民党幹部のシューテイをベオグラードに派遣し，パヴレの依頼をセルビアの野党連合に伝えた。シューテイは野党連合の代表にこう述べた。マチェックはツヴェトコヴィッチのザグレブ訪問を受け入れてよいと回答しているが，クロアチア問題の話し合いと解決策の策定にはセルビア人民の真の代表の参加を望んでいること，そしてこの代表者はユーゴスラヴィア急進連盟ではなく，野党連合であると彼は考えている。これに関連してマチェックは次の問題に回答を求めていると伝えた。それは，この交渉をマチェックは自らの名において（＝クロアチア農民党の代表者として）おこなってよいか，それとも先の国政選挙での名簿提出者（＝統一野党の代表）の立場で交渉することを野党連合は求めるかという問題であった。そして，もしパヴレ公のメッセージを受け入れるなら，野党連合の代表をザグレブに直ちに派遣する必要はないかとマチェックは尋ねていた[4]。

３月26日，シューテイの同席のもとで農業者党，民主党，急進党の代表は野党連合の幹部会議を開いた。その結果，彼らは次のようなメッ

セージをマチェックに伝えることを申し合わせた。クロアチア問題はセルビア人とクロアチア人の正当な代表の間で解決されるべきであり，そのような見方に立つならば，ユーゴスラヴィア急進連盟ならびにツヴェトコヴィッチ，コロシェッツ，スパホにそのような資格があるとマチェック博士はみることはできない。ザグレブへの代表派遣問題に関しては，野党連合は代表を派遣する用意がある。しかし，その前にツヴェトコヴィッチらに交渉の資格がないとマチェックが公言して欲しい。もちろん，このような声明がパヴレ公の側に悪意に解釈され，彼の計画および彼とマチェックとの話し合いの妨げになると見なされるのであればその必要はない[5]。

野党連合はシューテイが伝えたマチェックのメッセージに喜んでいた。彼らはパヴレの政権構想から一貫して排除され，協力の依頼がないことに不満を募らせていた。しかし，セルビア人民を真に代表する者はユーゴスラヴィア急進連盟ではなく野党連合だと述べて，野党連合の交渉への参加を求める姿勢をマチェックが示したために，パヴレの態度が変わるのではないかと彼らは期待を抱いた[6]。ところが，ユーゴスラヴィア急進連盟とツヴェトコヴィッチにはセルビア人を代表して交渉する資格がないというセルビアの野党連合が求めた声明をマチェックは直ちに公表しなかった。彼はツヴェトコヴィッチを条件付きで交渉の相手として受け入れたが，だからといってセルビアの野党連合の見地を無条件に承諾するつもりはなかった。マチェックは，その前にこの交渉でクロアチア農民党が提示しようとしていた要求事項に対して野党連合側が賛否を明らかにする必要があると考えていた。

クロアチア農民党は，3月28日，管轄地域の問題（クロアチアに委ねられる自治区の範囲）を話し合うため，野党連合代表にザグレブに来てほしいとのメッセージを送った。これを受けて野党連合の幹部は急進党のニンチッチの私邸で急遽会合を開いた。この会合にはセルビアの野党三党の代表だけでなく，ユーゴスラヴィア国民党のイェフティッチも参加した。そこでの結論は，管轄地域の問題についての協議は受け入れられない，したがって，ザグレブに代表を派遣しないということだった。ただし，彼らはトゥーパニャニン（農業者党）とクラマー（ユーゴスラヴィア国民党）をザグレブに向かわせ，何が問題なのかを事情聴取させることにした。同時に彼らはパヴレ公にもメッセージを送り，ツヴェトコヴィッチのザグレブ派遣を取りやめ，国王会議を招集するように要望した。しかし，これに対するパヴレ側の回答は，すべては確定していて，今さら変更できないというものであった[7]。

3月29日の朝，トゥーパニャニンはザグレブに到着した。彼は午前中に独立民主党のヴィルダーに会い，午後にはクラマーと共にマチェックに会った[8]。彼らに対してマチェックは，管轄地域の問題をめぐるパヴレとの話し合いの経過を説明した。トゥーパニャニンはマチェックに対し，このような交渉は1937年10月8日の野党間協定に反すると抗議した。これに対して，ツヴェトコヴィッチとは管轄地域の問題の協議に入らないつもりだとマチェックは述べる一方で，この問題を議論するため野党連合とユーゴスラヴィア国民党代表のザグレブ訪問を重ねて強く求めた[9]。

3月30日，セルビアの野党三党とユーゴスラヴィア国民党は代表者会議を開き，ザグレブから戻ったトゥーパニャニンの報告を聞いた。彼らは，マチェックの要請に応じてザグレブに代表を派遣するかどうかを議論した。その結果，ザグレブには代表団を派遣しないことにし，その代わりにトゥーパニャニンとヴライッチ（民主党）を派遣し，1937年10月7日の協定内容の見地にとどまるようにマチェックを説得することを申し合わせた。またツヴェトコヴィッチが首相としてではなく国王の代理人として来た場合を除いて彼とは協議に入らないようにマ

チェックに助言することを彼らは決定した[10]。

この会合での申し合わせに従って，ヴライッチとトゥーパニャニンはザグレブに向かった。彼らにクラマーとチュブリロヴィッチ（農業者党）が合流した。4月1日，ヴライッチ，トゥーパニャニン，クラマーは独立民主党のヴィルダーとコサノヴィッチと会い，このあとチュブリロヴィッチと共にマチェックを訪ねた。マチェックは，パヴレとの交渉の経過を改めて説明し，ツヴェトコヴィッチのザグレブ訪問に関してどのような回答をしたかを述べた。この会談では次のことが決まった。マチェックは，ツヴェトコヴィッチを政府の代表として受け入れるのではない。なぜなら，彼はセルビア人を代表する資格をもたないからだ。ツヴェトコヴィッチをマチェックが受け入れるのは国王の代理人としての資格においてである。しかし，野党連合とユーゴスラヴィア国民党は，管轄地域の問題に関してマチェックが王権の側とがいかなる取り決めをおこなっても認めないと彼らは述べ，マチェックが単独行動に走らないように釘を刺した。会談のあと，彼らは共同声明を発表し，「(先の総選挙で）マチェック博士提出の候補者名簿に参加したすべての政治集団は引き続き連帯を維持し，セルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人の協定に基づいてこの国の国家構造を最終的に決めるように尽力する」と述べた[11]。

この会談の結果はセルビアの野党連合を満足させた。共同声明は1937年10月8日の野党間協定が有効であることを実質的に裏書きするものであった。したがって，彼らは，交渉の手続きに関しては，野党連合が支持する見地にマチェックを引き留めることができるのではないかという見通しをもった。しかしながら，もしマチェックが野党間協定の見地を遵守してツヴェトコヴィッチとの交渉に臨んだとしたら，何の取り決めもおこなうことはできないことは明らかであった。実際，4月2日に開催されたセルビアの野党連合の幹部会合ではそのような見通しが語られ，そのあとマチェックとパヴレは事前に計画をもたずに話し合いを始め，マチェックはやがては周囲の圧力によってこの状況から離れるという声明が記者団に公表されていた[12]。

このとき，たしかにマチェックは野党連合との共同声明に合意していた。ところが，あとで述べるように，その後のツヴェトコヴィッチとの交渉では彼はこれを反故にし，管轄地域の問題を協議した。このことはこの段階での野党連合との連帯の確認はあくまで戦術的な譲歩であったことを示している。なぜなら，ツヴェトコヴィッチとの交渉がどのように進展するか分からない状況の下では，セルビアの野党連合との連帯を強調する方が政府側に対する圧力になる点で得策であったからである。

3　交渉の開始後のマチェックとセルビア野党の態度

1939年4月2日，首相のツヴェトコヴィッチはザグレブに到着し，マチェックと面会した。政治的な話し合いは翌日から始められた。4月3日と4日の二日間の会談で両者は二つの原則的問題を解決した。第一にツヴェトコヴィッチは，ユーゴスラヴィア急進連盟の代表ではなく，政府の代表にして国王の代理人という立場でここに来たと述べた。これによってマチェックが求めた交渉の第一の前提条件が満たされた。第二にツヴェトコヴィッチは，クロアチアが一定の領土をもち，特別の地位と権限をもつことを定めた協定を締結する用意があることを示した。これは彼がこれまでの政府指導者とは違い，マチェックの本質的な要求をめぐって交渉を進める意思があることを示していた。これまでの政府指導者は国家構造の再編を後回しにし，クロアチア農民党に閣僚ポストを提示して彼らを政権の側に取り込もうとするだけであった。しかし，ツヴェトコヴィッチはまずクロアチアの自治について協定を交わし，これを実行

に移すために合同政府を形成する考えであった[13]。

二人はクロアチアの管轄地域と権限についても話し合いをしたと見られるが，この段階では意見交換にとどまり，具体的な取り決めには至らなかった。ちょうどカトリックの重要な行事である復活祭にさしかかったので，マチェックは交渉を一時中断し，休み明けに再開することを提案した。ツヴェトコヴィッチはこれに同意し，ベオグラードに戻った。マチェックはこの期間を利用し，セルビアの野党連合とユーゴスラヴィア国民党に連絡をとった。

この会談の結果はセルビアの野党連合に反発を引き起こした。二人が合意した交渉の手順は野党連合が承認していない手続きであったからである。野党連合はパヴレ公の意向に配慮し，ツヴェトコヴィッチが国王の代理人の立場でザグレブに来た場合にはマチェックが彼と会うことを了承した。しかし，その場合にもマチェックがツヴェトコヴィッチと実質的な協議に入らないという条件を付けていた。ところが，外部に伝えられた情報から判断すると，マチェックは執拗に自分の見地に立って，クロアチアの管轄地域の範囲と権限を最初から確定しようとしているように見えた。しかし，この問題こそはセルビアの野党連合が後々の協議のために残しておきたいと考えていた問題であった[14]。野党連合の中でもっとも大きな不満を示したのは急進党であった。４月５日の会合では彼らはこう主張した。それは，マチェックが野党連合の名において発言をすることを認めないこと，ならびにこの交渉の責任はすべてマチェックとツヴェトコヴィッチにあり，野党連合はいっさいの責任を負わないと宣言することであった[15]。

二人の会談の３日後の４月７日，イタリアは突如アルバニアに侵攻した。親枢軸国の外交路線をとるユーゴスラヴィア政府は身動きがとれず，これを既成事実として受け入れるしかなかった。しかし，イタリアによるアルバニアの占領によって，ユーゴスラヴィアは南部の国境線からも枢軸国の圧力を受けることになった[16]。パヴレは，マチェックがユーゴスラヴィアの外交政策上の地位が悪化したことを考慮し，譲歩に応じてくれるのではないかと期待した。彼は軍用機を飛ばしてマチェック側近のシュバシッチをベオグラードに呼び，メッセージを送った。パヴレは，現下の国際情勢を考慮し，クロアチア農民党の代表を直ちに政府に参加させることを求めた。しかし，この状況に際しマチェックはパヴレの側が譲歩を余儀なくされる可能性が大きくなったと見ていた。したがって，マチェックはパヴレの要請に耳を貸さなかった。それどころか，党機関誌を通して，ベオグラードの支配層はチェコスロヴァキアの運命を教訓とし，クロアチア問題の解決のテンポを加速させなければならないと訴えた[17]。

アルバニアの危機はセルビアの野党連合の態度にも微妙な影響を与えた。彼らは４月８日に幹部会議を開き，対応を協議した。急進党の代表は５日の会合で述べた抗議のメッセージを送ることを主張したが，農業者党のヨヴァノヴィッチは国内外の情勢に配慮し，もう少し和らげたメッセージを送ることを求めた。結局，議論はそのような方向に落ち着いた。彼らは，マチェックに対して，野党連合と合意した交渉の指針を逸脱していることを注意し，ツヴェトコヴィッチとの話し合いを，1937年10月８日の野党間協定の見地に沿って進めることを求めることにした[18]。

すでに述べたように，マチェックはツヴェトコヴィッチとの前回の会談では具体的な事項を取り決める段階には入っていなかった。彼はその前に，ツヴェトコヴィッチと原則合意した交渉の手順ならびにクロアチアの管轄地域と権限の問題について，セルビアの野党連合の賛否を求めるために，交渉をいったん中断した。この件に関して，彼は側近のコシュティッチをベオグラードに派遣した。

４月11日と12日の二日間にコシュティッチは野党連合の代表と三度会合をもった。彼は次の

ように状況を説明した。ツヴェトコヴィッチはユーゴスラヴィア急進連盟の代表としての立場ではなく，政府代表かつ国王の代理人の立場でザグレブに来たと述べている。マチェックとツヴェトコヴィッチの会談はまだ意見交換の段階であり，したがって，あらゆる問題が話題になり，その中にはクロアチアの管轄地域と権限の問題も含まれていた。コシュティッチはさらにこう続けた。マチェックの願望はセルビアの野党連合と協定を結ぶことであり，そのため，クロアチアの管轄地域と権限の問題についてあらかじめ合意を達成しておきたいと考えている。この問題に関して合意を達成しておけば，マチェックはパヴレ公に次のような提案ができる。「私は野党連合と取り決めを交わしており，彼らと共に政府に入り，解決策を実行する用意がある」。コシュティッチはさらにこう述べた。マチェックはクロアチア問題の解決策が用意されていない政府に入閣することはあり得ない。彼は人民に約束したことを実行しなければならないと考えているからだ。ただし，我々は新しい状況にあるので，1937年10月の野党間協定が予定していた手続きを簡素化し，すべての政党が政府に参加して問題解決の責任を負うことにしたい[19]。

コシュティッチは，セルビアの野党陣営の指導部に対して，三つの選択肢を提示した。第一案はクロアチアの管轄地域と権限の問題に関して野党連合がマチェックと実質的な議論をおこない，その合意の上に連立政権を形成することであった。しかし，野党連合側は三つの異論を述べた。その一つは，すでに1937年10月８日の協定があり，新しい協定を結ぶ必要はないというものであった。二番目の点として，セルビアの野党は交渉に対等に参加することを認められていないし，将来の政権への参加も保証されていない。したがって，この提案はセルビアの野党に交渉の責任だけを負わせて，協定の実行には影響力をもたせない結果になる恐れがある。三番目の点として，この提案を受け入れればセルビアの側には野党連合と与党のユーゴスラヴィア急進連盟という二つの交渉主体が存在することになり，両者が党派的利益を優先して争えば人民に損失を与えるだけになる。第二案はツヴェトコヴィッチとの交渉を野党連合側がマチェックに一任するというものであった。しかし，これはセルビアの政党がクロアチアの政党の党首にセルビアの側に立って交渉をするように求める点で不自然だと指摘された。第三案はセルビアの野党はその代表をザグレブに派遣し，マチェックと共に一つの交渉団を形成し，ツヴェトコヴィッチとの交渉にあたるというものであった。この提案も，ツヴェツコヴィッチとマチェックがすでに合意している交渉の手順，すなわちクロアチアの管轄地域と権限の問題に関する交渉を受け入れることを前提としている点で，セルビアの野党は承認することができなかった[20]。

結局，コシュティッチの提案にはセルビアの野党陣営が受け入れ可能な案はなかった。クロアチア農民党の提案はトリックにすぎず，マチェックの側は不誠実な動きに出ていると野党連合の指導部は感じた。彼らは代案として，すべての政党の党首が参加する会議を招集し，そこであらゆる問題を議論することを提案した。しかし，これはこの状況では実現性のない案であった[21]。実際のところ，セルビアの野党陣営は明確な行動方針を打ち出せない状況にあった。マチェックとツヴェトコヴィッチが合意している交渉の手順には彼らは反対であったが，パヴレやマチェックに対する配慮から公然と交渉に反対することには躊躇していた。交渉に反対することによって，彼らは問題解決の障害物のように見なされるのを恐れていたからである。したがって，彼らは交渉の成り行きを見守り，自分たちの存在をアピールするチャンスが到来するのを待つしかなかった[22]。

コシュティッチが去って二日後の４月14日，首相のツヴェトコヴィッチは農業者党のトゥーパニャニンを呼び，マチェックと合意した事柄

を明かした。彼は，クロアチアには特別の地位を認めるが，その他の地域は現状を維持するという点で合意していると説明した。具体的には，クロアチア人の主要な居住地域であるサヴァ州とプリモーリェ州を合併し，これにヘルツェグ・ノヴォまでのドゥブロヴニクを付け加えることがすでに合意されていると述べた。しかし，これは正確な情報ではなかった，マチェックは，ツヴェトコヴィッチに対し，彼の権限によってクロアチアにどれだけの管轄地域を認められるかを打診したと考えられるが，具体的な事項はまだ何も合意されてはいなかった。ツヴェトコヴィッチが述べた事柄は，実は次回の交渉で彼がマチェックに提示しようとしていた案であった。彼はさらにトゥーパニャニンにこう語った。「パヴレ公は野党連合に政権を委ねる考えはない。ドイツとイタリアとの関係上好ましくないと考えているからだ。マチェックとの協定が成立したら，ユーゴスラヴィア急進連盟，クロアチア農民党，農業者党が参加する新政権が発足する。しかし，農業者党からはヨヴァノヴィッチとガヴリロヴィッチは入閣できないだろう」。以上のことから，パヴレは野党連合を排除して交渉を進めることを既定方針としていた。これはベオグラード滞在中にパヴレと謁見したコシュティッチにも告げられていたことをトゥーパニャニンは知った[23]。

ツヴェトコヴィッチがわざわざトゥーパニャニンを呼んだ理由は明らかではないが，恐らくはマチェックと野党連合との関係に亀裂を与えようとしたのではないかと考えられる。いずれにせよ，二人の会合はセルビアの野党に政府の既定方針を伝える結果になった。翌日（4月15日），トゥーパニャニンは野党連合およびユーゴスラヴィア国民党の代表者会議でこの件を報告した。

この報告を受けて今やセルビアの野党陣営にとって二つの事柄が明確になった。一つは交渉の枠組みは確定しており，マチェックと合意した手順に沿ってツヴェトコヴィッチは今後も交渉を担当するということである。しかも，ツヴェトコヴィッチの話しによれば，交渉は実質的な段階に入っていて，すでに具体的な事項が合意されているとのことであった。もう一つは協定締結後の政権構想からセルビアの野党連合が排除されていることであった。この結果，彼らはクロアチア農民党指導部に対する不信感を強めた。第一にマチェックがツヴェトコヴィッチとの交渉の内容や摂政パヴレとの取り決めを，セルビアの野党陣営に対し適時にまた的確に伝えていなかった。第二にベオグラードに来たコシュティッチはパヴレに謁見し，野党連合が政権構想から排除されていることを知らされていた。しかし，彼はこのことをいっさい告げずにセルビアの野党陣営と協議をおこなっていた。コシュティッチのねらいは，マチェックのために，ツヴェトコヴィッチとの交渉に対してセルビアの野党陣営側の全権委任を取り付けることであったと彼らは悟った。以上のことから，彼らはこのような交渉に参加する意味はないと最終判断を下した。しかし，ツヴェトコヴィッチが明らかにしたクロアチアの管轄地域案は彼らにも同意できる内容であったので，彼らはマチェックとの関係を維持し，交渉の行方を見守ることにした[24]。

コシュティッチの提案に示されるように，マチェックはツヴェトコヴィッチとの最初の交渉が終わった段階では，セルビアの野党連合を何らかの形でこの交渉に参加させたいと考えていた。ツヴェトコヴィッチは実質的にはユーゴスラヴィア急進連盟の代表であり，これに野党連合を加えた方がセルビア人の政治代表としての性格は強まると見ていたからである。マチェックはいうまでもなくクロアチア人の政治代表であり，交渉の相手がセルビア人の政治代表になれば，結ばれる協定はクロアチア人とセルビア人の正当な政治代表の間での合意という性格をもつことなる。しかし，コシュティッチがザグレブに戻ったあとマチェックは野党連合の参加を求めなくなった。その理由は，第一にクロア

チア農民党の要求に対し野党連合が否定的な態度を示したからであり，第二に野党連合を交渉から排除する姿勢をパヴレ明確に示したためであった。このような状況では，野党連合の交渉への参加は現実的にあり得ず，マチェックとしても，これ以上野党連合の参加を求めてパヴレの機嫌を損ね，今後の交渉が成立しなくなることは避けなければならなかった。

4　4月27日協定の成立とパヴレの受諾拒否

セルビアの野党陣営との協議のためにベオグラードに来たコシュティッチは，この機会を利用しパヴレ公に謁見した。パヴレはこう語った。「ツヴェトコヴィッチは具体的な提案を携えてザグレブに行く」。これを聞いたコシュティッチは，クロアチア問題の解決にパヴレが真剣な決意をもっていると確信した。この機会に野党連合の交渉への参加の問題が話題になったが，パヴレは彼らの参加をきっぱりと拒否した。クロアチア農民党の提案に対する野党連合の回答を聞いていたコシュティッチは，これに反論はしなかった。クロアチア農民党にとっては，具体的な協定の取り決めの段階に入ることにパヴレが言質を与えただけで十分な成果といえた。コシュティッチはツヴェトコヴィッチとも会った。彼も協定締結の意欲を明確に示した。パヴレの側が具体的な議論に入る意思をはっきりと示したため，マチェックの側も譲歩をし，野党連合の参加を前提条件としないことにした。こうして二度目の交渉の環境は整った。

1939年４月15日，ツヴェトコヴィッチはザグレブに到着した。二人は交渉の枠組みに関しては原則合意していたので，今回は直ちに具体的な議論に入った。ツヴェトコヴィッチは，クロアチアの自治に委ねられる地域として，サヴァ州とプリモーリェ州を合併し，これにドブロヴニク周辺地域を加える案を提示した。彼は，この案には最終的に国家構造を決める際に一定の修正を加えてもよいと述べた。マチェックは三つの代案を示した。第一案は1928年８月１日の農民・民主連合決議に沿って，歴史的な単位による境界付けをおこなうというものであった。これは中世に存在した「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア王国」の領土の再建を意味した。第二案はクロアチアを次のように区切ることにしていた。サヴァ州とプリモーリェ州の境界にシード，ブルチコ，グラダチャッツ，デルヴェンタ，ウナ川流域，ウナ川とサナ川の合流地域，ヤイッツェ，ゼーニッツァ，ヴィソコを含むように引き，さらにヘルツェグ・ノヴォまでのドゥブロヴニクを加える。ボスニアとヴォイヴォディナの残りの部分は別の単位とする。もしこの二つが別の単位にならないならば，第三案はクロアチアとセルビアの境界を，スボティッツアからイロークを通り，サヴァ川を横切ってサラエヴォの南までまっすぐに引き，そこからはプリモーリェ州の境界に沿い，この境界をヘルツェグ・ノヴォまで延長するというものであった[25]。

翌４月16日，ツヴェトコヴィッチはユーゴスラヴィア急進連盟副総裁のコロシェッツおよびスパホと面談し，４月17日，再びマチェックと協議をおこなった。二人の話し合いが行き詰まったのは，ツヴェトコヴィッチが提案した「サヴァ州，プリモーリェ州，およびドゥブロヴニク」という範囲を越える要求をマチェックがおこなっていたからであった。とくに大きな争点となったのは，「旧トルコ支配下のクロアチア」と呼ばれたボサンスカ・クライナの一部をマチェックが求めていたことだった。それ以外の点については重要な進展があった。すなわち，クロアチアに個々の中央省庁から一定の権限を移行させること，この協定を実行し，国家構造の最終的な再編を準備する合同政府を形成することでは両者は合意した。もっとも，クロアチアに認める権限の内容自体は議論されなかった。クロアチアの管轄地域については合意できなかったので，ツヴェトコヴィッチはいっ

たんベオグラードに戻り，パヴレとの協議の上で改めて回答を提示することになった[26]。

このあとマチェックは，交渉を有利に導くため，セルビアの野党の名においても話し合いができるように彼らの了承を得ようと考えた。そこでマチェックは，セルビアの野党と関係が深い独立民主党のヴィルダーとコサノヴィッチをベオグラードに派遣した。二人は，４月19日と20日にセルビアの野党連合とユーゴスラヴィア国民党の代表と会合をもった。彼らは，マチェックがツヴェトコヴィッチに提示した三つの案を説明し，セルビアの野党代表に同意を求めた。しかし，これを了承する者はひとりもいなかった。野党連合側は1937年10月８日の野党間協定を盾に，この交渉の不当性を指摘した。彼らはこの交渉自体が承認できないものであり，交渉を中止し，摂政パヴレを主宰者としてすべての国民政党の代表者が参加する合同会議に問題の解決を委ねるべきだと主張した[27]。

４月22日，三度目の交渉が始まった。ツヴェトコヴィッチは，前回のマチェックの提案に対する回答を提示したが，それはなおマチェックの要求とは開きがあった。協議の結果，双方の間で折り合いがつかない地域に関しては住民投票を実施し，その結果によって最終帰属を決めることで合意が達成された。これを含めて，この日に二人の間で合意された事項は次の通りであった。

１．憲法116条に基づき，サヴァ州とプリモールスカ州を直ちに合併し，これにドブロヴニク周辺地域を加えて一つの行政単位を形成する。これはクロアチア州と名付ける。クロアチア州の最終的な範囲は，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ，ダルマチア，スリイェム，ヴォイヴォディナの一部の地域で住民投票を実施し，住民の意思によって確定される。

２．中央政府は直ちにクロアチア州に行政権限を委譲する。しかし，外交政策，国防，最上位の国家行政に関する全般的な権限は共通の中央政府に残す。クロアチア州の特別の地位については，憲法に準じる効力をもつ協定によって保証する。

３．この国の国家構造を最終的に確定するため，合同政府を立ち上げる。この政府は新しい国家共同体の制度を準備し，これを施行する。新しく形成される行政単位では，セルビア人とクロアチア人は完全に対等同権であり，人びとは宗派や信仰によって差別されない。このことは各種の公的な組織や機関に人口比に沿った参加を実現することによって保証される。このような参加を実行に移す時期は，それぞれの利害関係者との協議によって決定される[28]。

しかし，協議の結果はまだ公表されなかった。４月23日，ツヴェトコヴィッチとマチェックは再度会談し，このあと二三日後に再び会談すると発表された。ツヴェトコヴィッチは一度ベオグラードに戻り，４月26日に再びザグレブを訪れた。パヴレ公を筆頭とする摂政団は，ダルマチアの一部（ボキ・コタル）とヴォイヴォディナの一部の帰属を住民投票に委ねることに反対していた。協議の結果，マチェックは譲歩をし，これらの地域をクロアチア州に含めないことに同意した。そこで上述の協定の文言は次のように修正された。「クロアチア州の最終的な範囲は，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ，スリイェムの一部の地域で住民投票を実施し，住民の意思によって確定される」。４月27日，クロアチア問題の解決のための二人の交渉は本日で終わり，まもなく最終的な決定が下されるという声明が発表された[29]。

このため，協定はすでに実質的に成立し，あとは摂政団の承認を待つだけだという雰囲気が外部に広まった。実際，クロアチア農民党指導部はそのように考えていた[30]。ところが，ツヴェトコヴィッチからは何の知らせも届かなかった。５月１日，これを不審に思ったマチェックは側近のシュバシッチをベオグラードに派遣し，事情を聴取させた。シュバシッチはベオグラードに三日間滞在し，パヴレおよびツヴェトコヴィッチに会った。ツヴェトコヴィッ

チが最終的に伝えたことは，４月27日に作成された協定については摂政団が受け入れを拒否したが，別の内容なら受け入れの可能性はあるだろうということであった。シュバシッチの報告を受けたマチェックは，ツヴェトコヴィッチに書簡を送り，その中で摂政団は４月27日の協定を拒否したと考えていると通告した。５月５日，クロアチア農民党の機関誌も協定は却下されたと報道し，この問題に関してクロアチア人民の代表者会議が召集される予定だと伝えた。しかし，翌日ツヴェトコヴィッチはこれに反応し，双方から出された提案に関して一致点の検討は続いていると記者団に述べた。彼の発言は，協定は却下されたのではなく，検討作業が続いており，したがって最終的にはまだ確定していないということを意味していた。このあとベオグラードではツヴェトコヴィッチ政権はもたないのではないかと噂された[31]。

ツヴェトコヴィッチは交渉が継続中であることを強調したが，４月27日に合意された協定案を摂政団が承認しなかったことは明らかであった。摂政団が協定案を拒否した理由ついては直接的な説明はなかったが，最大の難点と見なされた点は住民投票による最終帰属の決定であった。もっとも，ツヴェトコヴィッチは自分に委ねられた権限を逸脱してこのような取り決めをしたわけではなかった。彼は摂政パヴレの忠実な代理人として常にその承認を得て協議を進めていたからである。住民投票の件についても４月23日にベオグラードに戻った際にパヴレに報告しているはずであり，その際に得た指示を受けてマチェックと再び交渉し，４月27日の協定に合意した。したがって，ツヴェトコヴィッチがパヴレの知らないことに同意することはあり得ず，彼の越権行為を理由にパヴレが協定を拒否したとは考えられなかった。それゆえ，パヴレがこの協定の受け入れを拒否したのは，ツヴェトコヴィッチからこの協定の最終的な承認を求められた段階で，彼が当初の考えを変更したためであるとしか考えられなかった。

慎重な性格のパヴレはこの協定に最終的な裁可を与えるに際して，これに関係する様々な要因を考慮に入れたに違いなかった。この点に関して，クロアチアの歴史家のボバンによれば，ツヴェトコヴィッチが４月27日にマチェックと合意した協定をベオグラードに持って帰った時点ではパヴレにこの協定の承認を躊躇させる要因が揃っていた。

第一にクロアチア州の境界の引き方に関しては，あらゆる政治ファクターから抵抗が予想された。ボスニアの一部をクロアチア州に含ませることに対してはすでにムスリム機構代表のスパホが強い反対を表明していた。これに加えて，この協定が公表されれば，あらゆるセルビア人政党が反対を表明することは明らかであった。さらに軍部は国家の分割自体に抵抗することが予想された。彼らは連邦制的な国家組織は国防能力を弱体化させるとしてかねてからこれに強い反対を示していたからである。実際，この時期にパヴレは国軍の高官から公然と警告を受けていた。彼らはマチェックの要求するような形で協定を結ぶことには反対であり，その場合には国防の責任は負えないと述べていた[32]。

第二に住民投票による係争地域の帰属の決定という方法は民族間関係上，好ましくなかった。５月５日にイギリス大使のキャンベルと会ったパヴレは次のように説明した。まずこの国にはその他の少数民族がいること，とくにドイツ系とハンガリー系の住民がいることを考慮しなければならなかった。一部の地域でこのような方法を認めると，彼らの分離主義運動に利用される恐れがあった。次にクロアチア州には100万人のセルビア人が含まれることを考慮しなければならなかった。彼らの中からもまた自決権を求める運動が起こる恐れがあった。さらにクロアチア人が国家の分割を求め，独立した民族となろうとするならば，セルビア人も同様の要求を起こす可能性があった。すでに政府には様々なセルビア人団体から請願書が寄せられ，クロアチア人の要求をこのような形で受け

入れた場合にはセルビアでは革命に近い事態が発生するとセルビア正教の大主教と国軍の総司令部は警告を与えていた[33]。

第三に外交政策上の要因もパヴレの態度に影響を与えていた。ドイツとイタリアは，彼らが信頼していたストヤディノヴィッチが排除されたために，ユーゴスラヴィアの外交路線に警戒感を抱くようになっていた。彼らがクロアチア問題に関して従来どおりの方針で臨み，今後もこの国の維持を支持するかについては保証がなかった。そのため，パヴレは彼らの介入の余地をなくすためにもクロアチア農民党との協定を結び，クロアチア問題を解決しておこうとした。ドイツによるチェコスロヴァキアの解体とイタリアによるアルバニア占領は，パヴレにマチェックとの交渉を急がせた。ツヴェトコヴィッチとマチェックの交渉は比較的早く進展し，４月27日には合意に達した。他方，イタリアによるアルバニア占領後の緊張は急速に沈静化した。この間にイタリアとドイツを訪問した外相のツィンツァル-マルコヴィッチは，枢軸国の態度には変化がないと報告していた。このような状況は，クロアチア問題の解決はそれほど急がなくてもよいことを指示していた。ちょうどこのとき彼はイタリアおよびドイツの公式訪問を目前に控えていた。パヴレはこの機会に外交政策上の要因，とくにユーゴスラヴィアに対するローマとベルリンの態度を確かめたいと考えていた。彼にとっては，マチェックに対してどのような態度をとるか，クロアチア農民党に対してどの程度の譲歩が必要かはその上で確定される問題であった[34]。

5　マチェックとチアーノとの交渉

ここで興味深いことは，パヴレとの交渉を受け入れる直前にマチェックがイタリア外相のチアーノと接触をしていたことである。使者を務めたのはイタリア系クロアチア人のアマデオ・カルネルーティという人物であった。1939年３月20日，彼はチアーノを訪ね，マチェックのメッセージを伝えた[35]。

ちょうどその五日前には残部チェコスロヴァキアの解体が強行され，ミュンヘン協定が破られたことでローマの指導層はパニックに陥っていた。彼らは，今度はクロアチア問題にドイツが介入することを警戒し，これを未然に防ぐための措置を検討していた。ムッソリーニはヴェネチアの部隊に待機命令を出す一方で，外相のチアーノはパヴレに電報を打ち，マチェックと早期に交渉に入るように促した。このことによって，彼らはユーゴスラヴィアの領土の保全と政治的安定をイタリアの国益に一致すると考え，それゆえにクロアチア問題のすみやかな解決を望んでいることをパヴレに伝えようとしていた[36]。

チアーノがカルネルーティの訪問を受け入れたのはパヴレに電報を打った翌日であった。カルネルーティは，クロアチア人はドイツ人に敵意をもつと断りつつも，イタリアから支援が得られない場合にはドイツに支援を求めざるを得なくなることを強調した。彼は，マチェックはまずユーゴスラヴィアの国境の内部でクロアチア問題の解決するようにベオグラード政府と交渉をおこなうが，それがうまくいかなかった場合にはクロアチアの分離独立をめざし，その支援をイタリアに求めると述べた。その場合にはクロアチア人は武装蜂起し，イタリアに支援を求める。クロアチアは独立を宣言し，イタリアと軍事的・経済的な同盟関係を結ぶ。両国の関係は将来的にはイタリア国王を共通の元首とする国家連合となる。この提案をチアーノは直ちにムッソリーニに伝え，その了承を得た。翌日チアーノはカルネルーティを呼び，提案に対する回答を伝えた。それはイタリア政府の既定方針に沿ったものであり，カルネルーティの提案にも合致していた。チアーノはまずベオグラードとの交渉を求めた。それがうまくいかなかった場合には，反乱を起こし，イタリアの支援を求めてほしいと述べた。チアーノはマチェック

側に決してドイツと接触しないことを求め，あらゆる行動を彼に報告してほしいと語った[37]。

イタリアがユーゴスラヴィアに対してどのような態度をとるかは，ユーゴスラヴィアが枢軸国にどのような態度をとるか，またドイツがユーゴスラヴィアに対してどのような態度をとるかによって決まってくるものであった。このうち，クロアチア問題に対するドイツの介入の可能性については，イタリアはそれほど懸念をもつ必要はないと悟った。クロアチアはイタリアの権益圏であることをドイツがはっきりと認めたからである[38]。したがって，イタリアにとっては，ユーゴスラヴィアが枢軸国に対してどのような態度をとるかの方が大きな関心事になった。1939年４月にムッソリーニとゲーリングは会談し，ユーゴスラヴィアが親枢軸国の政策をとる限り，この国との友好関係を維持し，国内の状況を静観する態度をとることを合意した。その際，彼らは，ユーゴスラヴィアの統一の維持は両国の国益に沿ったものであるという点でも見解が一致した。ユーゴスラヴィア外相のツィンツァル-マルコヴィッチはチアーノとの会談で，ドイツおよびイタリアに対しては従来の方針を継続すると言明していた。他方，ユーゴスラヴィア国内ではマチェックとツヴェトコヴィッチの交渉が始まり，これが順調に進む限り，マチェックがドイツに支援を求めることはあり得ず，イタリアに介入を要請することもなかった。

この状況は５月の初めに変化した。４月27日の協定をベオグラードの摂政団が拒否し，これを受けて５月８日に開いたクロアチア人民の代表者会議で今後の内政外交上の政策決定について全権委任を取り付けたあと，マチェックはチアーノとの接触の再開を決意した。３月にカルネルーティが提示し，チアーノが同意した計画に沿えば，今やその第二段階，すなわち，ベオグラードとの交渉がうまくいかなかった場合のケースを検討すべき段階となっていた。

1939年５月18日，イタリアの公式訪問を終えた摂政パヴレがローマを離れるとすぐにカルネルーティはチアーノを訪ねた。カルネルーティは，イタリア政府とパヴレとの首脳会談の結果を尋ね，クロアチア農民党に不利になるような特別の取り決めが結ばれなかったことを確かめた上で，チアーノに対してこう述べた。マチェックはベオグラードと協定を結ぶ意欲を失い，クロアチアの分離独立をめざす行動を起こす決意を固めている。マチェックは，イタリアの求めに応じて６ヶ月以内に決起する用意があり，この行動の準備のため，1000万ディナールを必要としているとカルネルーティは伝えた。しかし，このときチアーノは独伊軍事同盟（いわゆる鋼鉄条約）の調印のため，ベルリン訪問を控えていた。そのため即答を避け，帰国後に改めて回答すると述べた。５月26日，カルネルーティはローマに戻ったチアーノを訪ねた。彼は，ベオグラードとの協定締結の意思はなく，分離独立の行動を起こすというマチェックの固い決意を再度伝えた。チアーノは，今回はこの働きかけを受け入れ，カルネルーティと共に次のような内容の協定を取り決めた。１．イタリアはマチェックの運動に2000万ディナールの資金を供与する。２．マチェックは４ヶ月ないし６ヶ月の間に反乱の準備を完了する義務を負う。３．このあと直ちにイタリア軍を呼び寄せ，治安を確保する。４．クロアチアは独立を宣言すると同時にイタリアと同盟関係に入る。クロアチアは独自の政府をもつが，外交と国防はイタリアと協働でおこなう。５．イタリアはクロアチア領内に部隊を駐留させる権利をもち，アルバニアでおこなわれているように政治顧問をおく権利をもつ。６．しかるべき後にクロアチアとイタリア国王を共通の元首とする国家連合の可能性を検討する。チアーノはこの協定にマチェックの署名を求めた[39]。

この協定案はイタリア側の立場から練り直されたものであり，マチェックの当初の提案よりもクロアチアをイタリアに強く結びつける内容になっていた。イタリアからの政治顧問の派

遣，イタリア軍の駐留，外交と軍事の協働はマチェクの側が求めていなかった事項であり，これはクロアチアをイタリアの保護国のような地位に置くものであった。他方，マチェックは関税と通貨同盟を提案していたが，これらは5月26日の協定案には欠如していた。しかし，いずれにせよ，この協定案はユーゴスラヴィアに対するイタリアの方針が変わったことを示していた。チアーノが提示した協定案はユーゴスラヴィアの解体をめざしていたからである。この変化の要因として考えなければならないのは次の二点である。

第一にイタリアにとっては，これは本質的な転換ではなかった。彼らはユーゴスラヴィアのアドリア海沿岸部を領有することを長年の願望としていた。第一次世界大戦後にロンドン条約で約束された領土が完全に認められなかったことを不服としたイタリアはユーゴスラヴィアに対して敵視政策をとり，とくにアレクサンダルが独裁制を導入した後にはクロアチア人過激派勢力（ウスタシ）に活動拠点を提供して，ユーゴスラヴィア政府の神経を逆撫でした。両国の関係はウスタシによるアレクサンダルの暗殺事件によって極端に悪化した。ところが，1936年後半にイタリアはユーゴスラヴィアに対する政策を見直した。その背景にはドイツのアドリア海進出を警戒しなければならなくなる一方で，英仏との関係を弱めたユーゴスラヴィアがドイツとの関係を深める傾向を示していたことがあった。イタリアはユーゴスラヴィアとの関係改善に国益を見出し，1937年3月に友好条約を結んだ。この条約によってイタリアは，ドイツのアドリア海進出を阻むため，ユーゴスラヴィアの統一と内政の安定に保証を与えた。しかしなら，イタリアはユーゴスラヴィアに対する領土要求を放棄したわけではなかった。それは一時的に棚上げにされただけであった。

第二にドイツとの軍事同盟の締結である。イタリアとドイツはユーゴスラヴィアの現状を維持することを何度も確認していたが，それは枢軸国が受け入れ可能な政策をこの国がとり続けることを前提条件としていた。ところが，ストヤディノヴィッチを排除したパヴレは慎重に従来の路線を修正しようとしているように見られた。パヴレは，5月のローマ訪問時にも国際連盟の脱退と反コミンテルン同盟の加盟を求める枢軸国の要請に対する回答を引き延ばしにしていた。この直後に締結された軍事同盟によって，ドイツとイタリアは相互に信頼感を高めた。イタリアは万一ユーゴスラヴィアに対して軍事行動を起こしたとしてもドイツは反対しないと確信した。ユーゴスラヴィアの存続を危うくするような内政上の危機が起こり，枢軸国がこれに介入する必要のある事態が発生した場合には，イタリアの権益が優先されることが了承されていたからである。イタリアの指導層はこのような状況を考慮に入れて，マチェックの働きかけを受け入れ，分離独立の行動を支援する用意があることを示した。彼らは一時的に棚上げにしていた領土要求を実現する好機が到来したと判断した。

5月26日に作成された協定案はザグレブに届けられたが，マチェックは署名を拒んだ。チアーノの日誌によれば，カルネルーティは手紙でマチェックは署名をしなかったことを伝え，その理由として二つの事情をあげていた。一つはベオグラードとの交渉の再開であり，もう一つはクロアチアとイタリアの将来の関係に関する問題を解決しておきたいとマチェックが考えていることであった[40]。

マチェックが協定に署名しなかったのは，恐らくはイタリア側の貪欲な要求に驚いたためと考えられる。しかしながら，ツヴェトコヴィッチとの交渉の行方がはっきりしていなかったので，マチェックはイタリア側との交渉の可能性は残しておこうとした。その証拠として，カルネルーティを通して伝えられたマチェックのメッセージはイタリアとの関係を完全に断つことを意味していなかった。マチェックがあげた理由は，ツヴェトコヴィッチとの交渉が行き詰

まった場合には，チアーノとの接触を再開することを意味していた。さらに彼はイタリアとクロアチアの将来の関係のいくつかを解決しておきたいと伝え，イタリア側に要求の変更を暗に求めていた。

6 交渉の再開と協定の成立

1939年6月下旬，マチェックとツヴェトコヴィッチは交渉を再開した。ベオグラード紙『ポリチカ』の報道によれば，彼らは6月27日，クロアチアのヴコヴァ・ゴーリッツァという町のシュバシッチの自宅で会談した[41]。このとき彼らはクロアチア州の範囲について合意に達した。権限委譲の問題については，細部の詰めの作業を専門家会議に委ねることにした。この会議には双方共に三人の法律の専門家を派遣し，クロアチア州に委ねられる権限と中央政府に残される権限について最終的な調整をおこなった。しかし，双方共にできるだけ多くの権限を自分の側にとどめようとし，専門家会議は進展が遅かった。マチェックとツヴェトコヴィッチは7月13日と27日にも会談したが，7月下旬に交渉は暗礁に乗り上げた。原因は憲兵の管轄権をめぐる議論であった。憲兵はクロアチア州知事の指揮下におくとマチェックが主張したのに対し，ツヴェトコヴィッチは最後まで同意しなかった。マチェックは，クロアチアはチェコスロヴァキアと似たような状況にあり，ベオグラードが秩序を与えなければドイツがこれを与えることになると外国の記者団に語った[42]。

7月16日から8月4日までパヴレがロンドンに滞在していたため，交渉は停滞した。しかし，8月初めにマチェックは，ジュネーブに滞在していたクルニェヴィッチから手紙を受け取った。彼は，戦争はいつ始まってもおかしくないと述べ，マチェックに協定の締結を急ぐように求めていた。このあとマチェックはツヴェトコヴィッチとの会談で，あとで見直しを可能とするような暫定的な協定を結びたいと表明した。ツヴェトコヴィッチはこれに応じ，8月16日，17日にザグレブ近郊のボジャコヴィナで専門家を交えてトップ会談を開催することを申し合わせた。しかし，この会談では，自治州の範囲をめぐって再び争論が発生し，交渉は中断の危機に陥った。自治州の範囲はすでに決着していたはずだったが，ツヴェトコヴィッチはモスタルをクロアチア州から除外することを求めた。クロアチア側の専門家として同席していたシューテイは激しく抗議し，ツヴェトコヴィッチはこの要求を取り下げた。その後8月20日の専門家会議で協定の最終案が完成し，あとは摂政団の裁可を待つだけとなった[43]。

8月22日，サヴァ州副知事のミハルジッチはマチェックの私邸を訪問し，摂政パヴレが協定案を承認したことを伝えた。8月24日，ツヴェトコヴィッチとマチェックはスロヴェニアの別荘に滞在中のパヴレを訪ね，その前で合同政府の形成を合意した。同日，ツヴェトコヴィッチとマチェックが合意した協定をパヴレが受諾したことが公表された。8月25日，ツヴェトコヴィッチは内閣総辞職を表明した。8月26日，協定の内容と合同政府の成立が正式に公表された。クロアチア側は6つの閣僚ポストを獲得した（クロアチア農民党5，独立民主党1）。セルビアの野党からは，ブランコ・チュブリロヴィッチ（農業者党），ラーザ・マルコヴィッチ（急進党），ボージャ・マクシモヴィッチ（元急進党）が入閣し，その他はユーゴスラヴィア急進連盟のメンバーならびに政党に属さない人物（外相のツィンツァルーマルコヴィッチと国防相のミラン・ネディッチ）が占めた。

ツヴェトコヴィッチとマチェックが合意した協定は政治的な申し合わせであり，法的な効力をもたない文書であった。そこで同じ日に「クロアチア州に関する規定」が公布され，協定に取り決められた事項に法的な効力をもたせた。同時に摂政団は「その他の州にクロアチア州の規定を適用することに関する規定」，「上院議員の解任と1938年12月選出の国民議会の解散を告

げる勅令」,「政治制度の法律に関する勅令」に署名をした[44]。

ツヴェトコヴィッチとマチェックが合意した協定は5項目から構成されていた。それぞれのポイントを紹介すると，第一項は改革を実行するために合同政府を形成する必要性を述べた。注目すべきはクロアチア州の設置と権限の移行は1931年9月憲法の第116条に基づいておこなわれると協定が述べていることである。これには特別の事情があった。現行の9つの州は前国王のアレクサンダルのイニシアチブで導入された行政単位であるが，彼はこれを1931年9月憲法の条文に明記し，裏書きした。したがって，州は単なる行政的な区分ではなく，憲法によって規定された国制であり，この州の地位を変更するには憲法の改正が必要とされた。ところが，摂政パヴレは国王が成人するまで憲法の改正をおこなわないと公言しており，この立場を変えないとすれば，クロアチア農民党の要求を実現することは不可能であった。しかし，1931年9月憲法はその第116条で国家の危急時に際し国王が憲法や法律の規定を無視して一時的な措置を導入することを認めていた。政府はこれを根拠に「クロアチア州に関する規定」を定め，現行の州の名称，境界および権限を変更しようとした[45]。

第二項はクロアチア州の範囲について，サヴァ州，プリモーリェ州，ドゥブロヴニク周辺地域にシード，イローク，ブルチコ，デルヴェンタ，グラダチャッツ，トラヴニク，フォイニッツァの各都市を合併し，一つの州とすると述べていた。4月27日協定の時点で政府側はサヴァ州とプリモールスカ州にドブロヴニク周辺地域を加えて一つの州を形成することを認めていたので，これを越える部分がマチェック側との係争地域となっていた。それはボスニア・ヘルツェゴヴィナ，スリイェムの一部の地域であった。これについてマチェックは上記の都市を獲得し，その要求をある程度実現させた。しかし，マチェックはこの結果に明らかに不満であった。それゆえ，彼はクロアチア州の境界はまだ暫定的なものだということを示すために，協定の中に「クロアチア州の最終的な範囲は国家構造の再編時に確定される」という一文を入れていた。協定調印直後の8月29日に開催されたクロアチア人民の代表者会議ではマチェックは交渉を物別れに終わらせないために合意できる部分で協定を成立させ，合意できなかった部分は後の協議に委ねたと説明し，出席者に理解を求めた。その上で彼は，ユーゴスラヴィアが最終的にどのような国家構造になるのか，とくにボスニアとヴォイヴォディナがそれぞれ自治的な単位となるのかどうかによって，クロアチア州の最終的な姿は大きく変わってくると述べていた。

第三項は新しい行政単位および統一国家の中ではセルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人の対等同権性が保証されるとし，より具体的には公的機関への対等な参加が保証されること，信仰上の相違によって差別を受けないこと，基本的な市民的・政治的な権利が平等に保証されることを述べていた。これは精神的な宣言を述べたものであったが，この国の現状では実現されておらず，それゆえ，必要不可欠な条項であった。

第四項は中央政府からクロアチア州に管轄権限が移管される行政事項を列挙していた。それらは，農業，商業，工業，林業，鉱業，土木事業，社会政策，公衆衛生，体育，学校教育，司法，警察の12の分野であった。ここに列挙されていないすべての分野は中央政府の所管として残された。その主なものは，外交，国防，交通，郵便，電信・電話である。またクロアチア州に移管された事項についても，全国家的な利害が大きいものは中央政府に残るとされた。たとえば，公共の秩序と治安の維持のための諜報活動がそれであった。第4項はまたクロアチア州にその行政をおこなうために財政上の独立性を保証していた。これはクロアチア州が独自の収入源をもち，自立した予算を計上し，執行できる

ことを意味していた。しかし，クロアチア州がどのような種類と形の収入源をもつのかは今回の交渉では詰め切ることができず，今後の話し合いによって特別の規定を設けることになった。この点でもこの協定に定めるクロアチア州の権限は確定的なものではなかった。

第五項はクロアチア州に移管された行政事項に関してはクロアチア議会（サボル）と国王が合同で法律の制定権を行使すると述べていた。国王と議会は法律の提案権をもち，国王はこれをクロアチア州の行政府の長である総督（バン）に委任する。議会が採択した法律は総督の署名を得て国王の裁可を必要とする。クロアチア議会の議員は秘密投票の普通選挙によって選出される。なお1940年１月に制定された選挙法によれば被選挙権は24歳以上の男子がもち，議員の任期は３年とされた。国王は議会の解散権をもつが，同時に３ヶ月以内に選挙をおこない，４ヶ月以内に新しい議会を召集しなければならないとされた。クロアチア州に設置される行政府の長は総督（バン）であり，彼は国王の名のもとに行政を遂行する。総督は国王によって任命され，また解任される。総督は議会と国王に責任をもつ。クロアチアの行政府，すなわち総督府は11の部門から構成され，それぞれの長は総督が任命する。総督府は所管の行政事項に関しては中央政府から完全に独立してその執行権を行使する。クロアチア州はまた通常の裁判に関しては完全に独立した司法権をもつ。

第六項はクロアチア州の範囲と地位は後に憲法によって保障され，クロアチア州の同意なしには変更されないと述べた。第七項は，出版に関する新しい法律，結社・集会に関する新しい法律，国会議員選出に関する新しい法律，その他この協定を実行するために必要な法律をすみやかに制定すると述べた。

ツヴェトコヴィッチとマチェックが合意した協定ならびに「クロアチア州に関する規定」には確定的でない部分があったが，クロアチア州の設置はユーゴスラヴィアの国家の構造とイデオロギーを大きく変えるものであった。第一にクロアチア州は国家とは言えないが少なくとも自治的な単位であり，これは中央集権主義とは異なった考え方で国家を再編することを意味した。第二にクロアチア州はクロアチア人の歴史的，民族的な居住地域を管轄範囲として設定されていた。これはクロアチア人に民族的な政治・行政単位を承認するものであり，単一民族的な見方で国民を一つの国家に統合しようとする考え方から脱却して国家の再編をすることを意味していた。

7　8月26日協定の問題点

この政治協定の問題点を検討しようとするとき，まず考えなければならないことは，それは誰がどのような資格で結んだ協定であったのかということである。

改めていうまでもなく，協定の署名者は王国政府首相のツヴェトコヴィッチとクロアチア農民党および農民・民主連合代表のマチェックであった。この場合，マチェックがクロアチア人を代表する民族的な指導者であることは明らかであった。ラディッチの衣鉢を継ぐ不屈の闘士であるマチェックがクロアチア人農民から絶大な支持を得ていたことは，前回の選挙結果が明確に示していた。ではツヴェトコヴィッチは誰を代表していたのだろうか。彼がセルビア人を代表するような権威のある指導者ではなかったことは明らかであった。彼は，実力者のストヤディノヴィッチが排除されたあとに摂政パヴレによって後継首相に据えた人物であり，一般国民には馴染みのない政治家であった。この交渉の開始時に確認されたように，ツヴェトコヴィッチは国王の代理人としてマチェックとの協議に臨んだ。もっと端的に言えば摂政パヴレの代理人である。

パヴレは暗殺された前国王アレクサンダルの従兄弟であった。彼は前国王が生前に作成していた遺言書によって指名された３人の摂政団の

筆頭者であり，未成年の国王ペータル二世に代わって国王権限を遂行する地位に就いた。このパヴレはアレクサンダルの治世の時代には重要な役職からは遠ざけられていた人物であった。彼自身もベオグラードの宮廷に居心地の悪さを感じ，１年の過半を国外で過ごしていた。そのため，その存在は一般のセルビア人にはほとんど気づかれなかっただけでなく，ベオグラードの政治家の間でもよく知られていなかった。したがって，パヴレは前国王アレクサンダルの暗殺後に突然姿を現した統治者であり，明らかに権威も経験も不足していた[46]。それゆえ，彼はある時期まではストヤディノヴィッチに政治の実権を委ねてあまり表に出ないようにしていた。しかし，1939年初めに彼は全権を掌握し，自らのイニシアチブでクロアチア問題の解決にあたることを決意した。

イギリスで教育を受けたパヴレは政治や文化の面で西欧志向が強く，この国のバルカン的な政治風土を軽蔑していた。彼はセルビアのプリンスとしては珍しく，セルビア主義に染まっていない人物であった。前国王のアレクサンダルもクロアチア人やスロヴェニア人の王でもありたいと望み，ユーゴスラヴィア的に振る舞おうとした。しかし，彼の念頭にあった国家像は実質的には集権的な拡大セルビア国家であり，そのユーゴスラヴィア主義は統合的な単一国民国家主義であった。このような考え方にとらわれていた前国王のアレクサンダルは連邦制には強い嫌悪感をもち，複合的な国家編成への転換の必要性を最後まで認めるには至らなかった。しかし，セルビア主義に染まっていないパヴレは単一制国家の放棄に抵抗が少なく，クロアチア人に対して準国家的な単位の形成を承認した。この意味でパヴレは，アレクサンダル以上にユーゴスラヴィア的な観点に立ち，マチェックとの協定を成立させることができた。しかし，彼の決断はセルビア主義の伝統に忠実でなかった分，セルビアとセルビア人の利益を犠牲にしたとして，セルビア人の反発を招くことになった。

第二の問題はこの政治協定によってユーゴスラヴィアがどのような国家になったのかということに関係する。ユーゴスラヴィアの中にはクロアチア州という自治単位が創設された。この点で従来の中央集権的な国家編成は大きく修正された。しかし，ユーゴスラヴィアの残りの部分は手つかずのままであった。クロアチア州とその他の州は国制上の地位が根本的に異なっていた。クロアチア州は中央政府からほぼ独立した自治単位であったが，その他の７つの州は依然として中央政府の管轄下にある行政単位であった。他方，クロアチア州はクロアチア人の歴史的，民族的な居住地域を管轄地域とし，クロアチア人に民族的・政治的な独自性を承認する考え方に立って形成されていた。従来の国家は超歴史的なユーゴスラヴィア単一国民主義を国家イデオロギーとしていたが，クロアチア州の境界の設定はこれを否定するものであった。しかし，クロアチア州以外の７つの州は依然として1931年９月憲法に基礎付けられた単一国民国家の構成部分であった。このため，ユーゴスラヴィアは変則的な国家編成をとると同時に，全体としては整合性のない，あいまいな性格の国家となった。

ツヴェトコヴィッチとマチェックはクロアチア州の範囲と地位は最終的なものではなく，あくまでも国家構造再編の第一段階であることを申し合わせていた。これはユーゴスラヴィアの残部の地域についてもそうであった。そのため，８月26日に摂政団が公布した一連の勅令の中には「その他の州にクロアチア州の規定を適用することに関する規定」が含まれていた。ところが，この規定に含まれる条文は実質的には一つだけであり，それも「1939年８月26日公布のクロアチア州に関する規定は，王国の規定によって，その他の地域にも適用することができる。その際，州を合併したり，その範囲を変更したりできる」と述べているだけであった。したがって，この段階では具体的にはどうするか

は決まっておらず，再編の可能性だけが指摘されていただけであった。

思い起こせば1937年10月８日にクロアチアとセルビアの野党が合意した政治協定は，政治体制の民主化と国家構造の再編問題を一体的に解決することを目標としていた。それは，手続きとしては，政党制度と選挙制度を改正した上で憲法制定議会選挙を民主的に実施し，この議会の場でセルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人議員の多数の同意によって新しい国家構造を定めた憲法を採択することを予定していた。しかも，このときの国家構造の再編は実質的にはクロアチア問題の解決を重要な目的としていたが，クロアチア人居住地域に範囲を限定したものでは決してなかった。この再編は，ユーゴスラヴィアの全地域に関わる国家構造の改造を予定していた。いいかえると，協定の見地はあくまで全体的な国家構造の再編の結果としてクロアチア問題の解決を実現するというスタンスをとっていた。

この野党間協定と比較すると，1939年８月26日の協定は次の四点で大きな乖離があった。第一にこの協定は政治体制の民主化の問題をいっさい取り上げていなかった。この協定と同じ日に公布された勅令の中には国王独裁制のもとで制定された選挙法の廃止を告げる勅令が含まれていたが，それは新しい選挙法の制定は今後内閣に委ねると述べているだけであった。第二にこの協定は正式な改憲の手続きを踏まずに現行憲法の内容を実質的に変更しようとしていた。それは，憲法第116条を根拠に，いわば緊急避難的措置としてクロアチア州の設置と権限の移管を実行しようとしていた。第三にこの協定はセルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人のそれぞれを正当に代表する者の話し合いの結果として達成された合意ではなかった。交渉の当事者としてはクロアチア人の代表はいたが，セルビア人とスロヴェニア人の代表は欠落していた。第四にこの協定はユーゴスラヴィア全体の国家構造を作り替えようとするものではなく，クロアチア人居住地域に範囲を限定した改革を取り決めたものであった。

8　８月26日協定に対するセルビアの政治集団の反応

８月26日協定に対するセルビアの政治集団の反応は複雑であった。まず交渉から排除された野党連合は三者三様の反応を示した。このうち，もっとも強い異論を提出したのは民主党である。

国家構造の再編問題に関して，野党連合の中では民主党はクロアチア農民党にもっとも近い見解をもっていた。この党は国王独裁制の時代に複合的な国家編成への移行を承認し，党首のダヴィドヴィッチはセルビア，クロアチア，スロヴェニアにボスニア・ヘルツェゴヴィナを加えて四つの連邦単位の設置を提案していた。しかし，彼らは，ツヴェトコヴィッチとマチェックの交渉が始まると，クロアチア州の範囲と権限の問題を最初に確定しようとする交渉の手順に反対を唱えた。彼らは，全体的な国家共同体の原則と性格を明確にし，共通国家の枠組みを確定した上でないと，国家の分割の問題は議論できないはずだと主張した。８月26日協定の締結後，民主党は声明を発表した。彼らはこの協定は1937年10月８日の野党間協定の精神に反して，全体的な国家構造の再編問題からクロアチア問題だけを分離しようとし，その他の地域の問題を置き去りにしたと批判した[47]。

1939年10月16日，民主党は「現在の国情に関する民主党の見解」と称する小冊子を公表し，その中で８月26日協定に対しさらに厳しい批判を加えた。これは次の三点から構成されていた。第一にこの協定は，全体的な国家秩序に関する基本的な原則を確定せずに国家の分割の問題を提起し，一部の地域を分離した。第二に全体国家の性格があいまいになり，これに伴って国制上，セルビアは不分明な地位に置かれることになった。第三にスロヴェニアやクロアチア

は人民を代表する政党が支配しているのに対して，セルビアはそうではない。ここではユーゴスラヴィア急進連盟というセルビア人を代表しない政党が支配し，独裁体制が続いているために，セルビアはさらに困難な地位に置かれている。重要な変化は，このような主張を通して民主党が「セルビア問題」を提起したことであった。1939年12月には彼らはセルビア問題の解決のためにクロアチア州と同等の地位の自治単位の形成を主張した。民主党は，これまで自分らが批判してきた手続きをセルビア人の居住地域に適用するように求めた[48]。

8月26日協定はクロアチア州の管轄地域は確定しておらず，それは今後の全体的な国家構造の再編の中で確定すると述べていた。したがって，クロアチア側は新たな領土要求をする公算が強く，しかも彼らがセルビアの領土だと見なす地域に別の国家的単位，具体的にはボスニア・ヘルツェゴヴィナ，モンテネグロ，ヴォイヴォディナ，マケドニアが設定される可能性もあった。このため，民主党はセルビアの自治単位を設定することによって，これらの構想の実現を阻止しようと考えた。民主党は当初の国家全体の連邦制的な再編を求める立場を放棄し，この国の中に大セルビア的な単位を優先的に確保しようとする立場に転換した。その後，彼らは「セルビア人は結集せよ」とのスローガンを掲げ，セルビア問題の解決を求める運動を始めた[49]。

しかし，民主党の中には8月26日協定を支持するグループもいた。彼らにとってクロアチア問題は優先課題ではなかったが，この問題を片づけることによって，他の問題，とくに政治の民主化が進むことを期待した。民主党左派と呼ばれたこのグループは「セルビア人の結集」のスローガンを覇権主義的願望として非難した。もっとも，彼らは少数派であり，民主党指導部は大セルビア主義的な傾向を深めていくことになった。

急進党総務会は8月31日に決議を採択したが，8月26日協定に対して評価を留保していた。ツヴェトコヴィッチとマチェックの連立政権には急進党幹部のラーザ・マルコヴィッチが入閣していた。しかし，急進党総務会は，マルコヴィッチは党首の承認を得ずに政権に加わったと主張し，したがって，急進党はこの政権には党として参画していないという立場をとった[50]。彼らが様子を見るような態度をとった最大の動機は，この協定を成立させた摂政パヴレに対する配慮であった。彼らは政権の座に復帰するチャンスはまだ消えていないと見て，パヴレの機嫌を損ねるような批判を控えていた。

実際，彼らの政権への復帰は一定の見込みがあった。首相のツヴェトコヴィッチは新党を結成するため急進党側に合流を呼びかけていたからである。この問題を決着させるため，1939年末にツヴェトコヴィッチは急進党党首のスタノエヴィッチとトップ交渉をした。しかし，二人はどちらのグループが主導権を握るかという点で対立し，最後まで折り合いがつかなかった。ツヴェトコヴィッチの見方によれば急進党総務会はユーゴスラヴィア急進連盟を離脱したグループであり，したがって，彼らが同党に復帰することによって再統一が達成されると考えていたが，このような見方を急進党側は受け入れることができなかった。彼らはまったく逆の見方をしていたからである[51]。

ツヴェトコヴィッチらとの合流の可能性がなくなったとき，急進党は8月26日協定の批判を開始した。1940年3月，彼らは「8月26日協定はどのように成立したか」という小冊子を刊行し，急進党総務会の見解を述べた。この文書はマチェックを，1937年10月8日の野党間協定の理念を放棄し，ユーゴスラヴィア急進連盟の体制を支持したと非難した上で，8月26日協定の問題点を指摘した。それらは民主党の批判と共通する部分が多いが，まず強調されたのは，この協定はこの国の全体の利益を脅かしたことである。彼らによれば，クロアチア州の認定はクロアチア人民族主義を隆盛にし，その反作用と

してセルビア人民族主義を喚起した。これらはすべて，南スラヴ人国家の理想を破壊する方向に作用した。全体国家の問題，全体と個別の単位の関係，ならびに個別の単位相互の関係をはっきりさせずにクロアチア州を設置したことは深刻な困難を招く結果になった[52]。

しかし，急進党総務会は民主党とは異なり，セルビアの自治単位の形成を主張する立場には立たなかった。野党連合の中ではもっとも保守的な政党であった急進党は1920年代から統合的な単一制国家を支持し，この見解を基本的に変えていなかった。彼らは，セルビア人，クロアチア人，スロヴェニア人の地位は単一制国家の枠組みの維持よってのみ保証されると考えていた。彼らは中央集権主義を是正する必要性は認めたが，民主党とは異なり，連邦主義を受け入れる見地はまったく示さなかった。彼らが考えていた解決策は地方分権の拡大であった。クロアチア州の設置によって始まった国家の再編はこのような考え方とはかけ離れたプロセスであった。したがって，彼らはクロアチア人代表と交渉し，セルビア人の地位と共通国家の力を弱めるような項目を削除したいと主張した[53]。

農業者党は内部に左右の派閥対立を抱え，中間派が執行部を握る政党であった。国家構造に関する見解では国王独裁制の時代から連邦制を求める見解が党内で強まっていたが，連邦制をどのように理解するかはメンバーによって異なり，党としては統一見解を打ち出せなかった。ツヴェトコヴィッチとマチェックの交渉が始まると，農業者党は民主党および急進党に同調し，その手続きを承認しない立場に立った。ただ幹部のブランコ・チュブリロヴィッチだけはこの交渉の手順を承認し，農業者党は単独でもこの交渉に参加すべきだと何度も党首のヨヴァノヴィッチに直訴した。8月26日協定の成立後，チュブリロヴィッチは農相として入閣した。

ヨヴァノヴィッチの死後に新党首となった右派幹部のガヴリロヴィッチは方針を変え，9月初めに開催された幹部会議では8月26日協定を概ね承認する決議をとりまとめた。農業者党はまたチュブリロヴィッチの入閣を承認した。農業者党の支持は政権側に歓迎され，その後ソ連との国交が樹立した際にガヴリロヴィッチは初代モスクワ駐在大使に任命された。しかし，農業者党はクロアチア州の範囲と権限を完全に承認できず，またセルビアにおけるユーゴスラヴィア急進連盟の支配に不満をもっていたので，政権側に強く結びついてはいなかった。とくにドラゴリュブ・ヨヴァノヴィッチが率いる左派グループは8月26日協定の実行に強く反対し，1939年末には同党の政権離脱を求める決議を採択した。1940年2月には彼らは農業者党を離党し，人民農民党を結成した[54]。

野党連合三党以外にセルビアで影響力をもった政治集団としてセルビア急進党とセルビア文化クラブがあり，両者はいずれも8月26日協定を厳しく批判した。

セルビア急進党は前首相のミラン・ストヤディノヴィッチが結成した政党であった。彼は政権の座を追われたあともユーゴスラヴィア急進連盟の党首の地位に留まっていたが，ツヴェトコヴィッチとマチェックの交渉が一時中断した機会をねらって交渉に反対する活動を開始した。この行動には同党所属の100名の議員が同調し，彼が党内に依然大きな影響力を保持していることを示した。ツヴェトコヴィッチは党首の地位に就き，ストヤディノヴィッチとその仲間を党から除名したが，彼らはこの決定を認めず，執行部を自称していた。1940年2月，ストヤディノヴィッチ派は90名の前議員を集めて新党の結成を宣言した。しかし，この政党を政府は承認しなかった。

セルビア急進党は8月26日協定の成立をクーデターに等しい行為と見なした。彼らは，この協定によって国家と国民の統合を求める見地は放棄され，クロアチア人の地域にだけでなく，純然たるセルビア人の居住地域の上にもクロアチア人国家が建設されたと主張した。彼らによれば，新しい国家秩序はセルビア人に問いかけ

られることなく，その承認も得ずに半ば強制的にセルビア人に課せられた。その結果，単一不可分のユーゴスラヴィア王国が連邦制的な土台に立った個別の民族国家の連合体に変わった。しかし，彼らは全セルビア人の統合を妨げるような境界の設定は認められないと主張し，そのような境界の線引きをした８月26日協定の破棄を求めた。その上で，セルビア急進党は，クロアチアの内部のセルビア人やボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人を含めて全セルビア人の統合を断固として求めると主張した。以上を要するに，セルビア急進党の要求は実質的には国内の全セルビア人の居住地域を包摂した大セルビア的な国家単位の樹立であった[55]。

ユーゴスラヴィアが統合主義的で中央集権的な国家を維持していた間にはストヤディノヴィッチの政治構想はユーゴスラヴィア的であった。しかし，これが不可能になるやいなや，彼の政治志向はセルビア的志向を強め，さらには大セルビア主義的，民族主義的な主張に転化した。ストヤディノヴィッチは政権の座への復帰の願望をもち，この路線のもとにセルビアの他の政治集団を糾合しようとした。彼は枢軸国の圧力によってこの国の路線は内政面においても転換が必要となり，ベルリンとローマの信任を得ている自分の出番があると見ていた。ドイツとイタリアが信頼していたストヤディノヴィッチはパヴレ公にとって脅威であり，心配の種であった。ストヤディノヴィッチはユーゴスラヴィア急進連盟の支持者に影響力を残しており，その存在はこの党の結束を強化しようとしていたツヴェトコヴィッチには大きな障害であった。このため，政権側はストヤディノヴィッチの計画を挫き，これを無力にしようとした。1940年４月，政権側はストヤディノヴィッチを軟禁状態に置いた。

セルビア文化クラブはセルビアを代表する政治集団を志向し，むしろ「セルビア政治クラブ」といった方がふさわしい集団であった。1937年に創設されたこの集団の目的は，超党派の立場からセルビア問題を研究し，セルビア人の民族的・文化的な利益を守っていくことにあった。その構成メンバーはセルビアの知識人であり，ベオグラード大学法学部で憲法学を教えていたスロボダン・ヨヴァノヴィッチが代表を務めた。セルビア文化クラブは1939年11月に「セルビアの声」を刊行し，８月26日協定はセルビア人とセルビアの利益を脅かしていると主張し，これを破棄し以前の状態に戻す宣伝活動をおこなった。彼らは協定締結の交渉にセルビア人の代表が参加しなかったことを問題視し，８月26日協定をあらゆる面で否定的に評価した。とくにやり玉に挙げたのはクロアチア州の境界付けであり，それがセルビア人の居住地域を包摂して設定されたことであった。

セルビア文化クラブは，ユーゴスラヴィアの紐帯を強化することなしにはセルビア人やクロアチア人の自由はあり得ないと主張し，国家と国民の統合を損なう今回の国家構造の再編に反対を表明した。彼らは，憲法第116条はクロアチア州を創設する法的な根拠とならないと主張した。ところが，まもなく彼らは憲法第116条を根拠にセルビアの自治単位を創設することを要求した。彼らの考えでは，このセルビアの単位にはクロアチア州とスロヴェニア以外のすべての地域が包摂されるはずであった。彼らにとって大きな不満はセルビア人が多数を占める地域をクロアチア州が含んでいることであり，クロアチアのセルビア人に対し，クロアチアに残るかセルビアの単位に加わるかその意見を聞くべきだと主張した。彼らは，あちこちから起こっているセルビア人の結集を求める運動に呼応し，すべてのセルビア人を包含するような超党派の共闘戦線の形成を求めた[56]。

9　クロアチアにおける分離主義勢力の台頭

８月26日協定はマチェックらにとっては大きな成果であったが，クロアチア人の反対勢力が

すべてこれを歓迎していたわけではなかった。そこには二種類の不満があった。一つは協定によってクロアチアが獲得したものは少なすぎる見る不満であった。もう一つはこのような協定を結んだこと自体を不満とし，クロアチアをユーゴスラヴィアの枠組みの中に押し留めたことを問題視する見解である。前者はクロアチア農民党の陣営内に存在する不満であり，後者はウスタシの諸派の見方であった。この二つの不満は次のような事情から共鳴し合う要素があった。

ウスタシは国王独裁制の時代にクロアチア権利党（通称フランク派）のパヴェリッチが始めた民族運動であり，彼は国外（イタリアやハンガリー）に拠点を置き，国内の運動を指導していた。ウスタシとクロアチア農民党は共にクロアチア問題の解決をめざしたが，両者は目標と戦術を異にしていた。ウスタシは独立のクロアチア国家の樹立を目標とし，テロ活動によってユーゴスラヴィアの国家的転覆をねらった。これに対して，クロアチア農民党は話し合いによりユーゴスラヴィアの枠内でクロアチア問題を解決することを第一目標とした。しかし，両者は国王独裁体制という共通の敵に対抗するために，ゆるやかな協力関係を結んでいた。たとえば，1932年11月の反体制決議（ザグレブ条項）の作成の際には農民・民主連合の幹部会議にクロアチア権利党を代表してミレ・ブーダクが参加した。

1935年にマチェックは方針を転換し，セルビアの野党と選挙協力をおこなった。1937年10月にはクロアチア農民党はセルビアの野党連合と政治協定を締結した。ウスタシの指導部はクロアチア農民党の路線転換を裏切りだと見なした。しかし，彼らは戦術的に協力関係を保った。1935年６月に発足したストヤディノヴィッチ政権は議会外の野党勢力に対して宥和政策をとり，その活動に対する統制を大幅に緩めた。クロアチア農民党はこれを利用して党組織の再建をおこなったが，この機会にクロアチアのあらゆる政治勢力がクロアチア農民党の隊列に流れ込んだ。彼らはクロアチア農民党に合法的な活動の枠組みを見いだそうとした。他方，クロアチア農民党指導部はクロアチア問題の解決という目標で一致できるならば，あらゆる政治勢力を受け入れた。彼らはこれによってクロアチアの政治代表としての性格を強め，ベオグラードの支配層に対してより大きな存在感を示そうと考えた。しかし，そのため，クロアチア農民党は政党としては寄り合い所帯の性格を強め，フランク派のシンパは勢力を増した。

一方，ウスタシの陣営も一枚岩ではなく，いくつかのグループに分かれていた。彼らは独立のクロアチア国家を樹立するという目標を共有しているだけであり，運動方針の相違から互いに攻撃し合うこともあった。たとえば，1938年12月の総選挙に際しては，国内のウスタシ諸派はセルビアの野党連合と合同名簿を提出したクロアチア農民党指導部を非難し，投票の棄権を呼びかけた。しかし，1938年７月にイタリアから帰国したブーダクはマチェックの候補者名簿への投票を呼びかけた。彼はマチェックの政策を承認しないが，この国家とその国境線の存続に反対するため，クロアチア農民党に投票すると述べた。しかし，このような態度は首尾一貫性を欠くものとして，他のウスタシのグループからだけでなく，クロアチア農民党からも批判された。

８月26日協定の締結は諸派に分かれていたウスタシを一つの戦線に結束させることになった。「マチェックは，この協定によって独立クロアチア国家の樹立というウスタシの陣営と共有していた目標を裏切った」。彼らはこのように主張し，様々な形でこの協定に反対する活動を始めた。この活動は後にエスカレートし，爆発物を仕掛けたり，セルビア人やユーゴスラヴィア的な志向をもったクロアチア人を襲撃したりする事件も起こった。クロアチア州の総督府はウスタシの活動を取り締まったが，その取り組みは徹底さを欠いていた[57]。その理由の一つは，

クロアチア内部の対立を激化させることをクロアチア農民党指導部が望まなかったことである。外部の圧力に対抗するため，彼らはクロアチアの内部の結束を固める必要性を強く感じていた。第二にクロアチア農民党の親衛隊である「クロアチア農民」や「市民防衛隊」ならびに総督府の治安機関のメンバーにはフランク派のシンパが多く，ウスタシを厳しく取り締まると彼らの離反を招く恐れがあった。しかもクロアチア農民党の内部にも８月26日協定に異論があって，指導部は断固たる措置がとれなかった。

マチェック自身が認めているように，８月26日協定はクロアチア農民党側の要求を完全に満たしたものではなかった。クロアチア州の範囲に関しては，マチェックは今回の交渉ではボスニア・ヘルツェゴヴィナの係争地域をめぐって合意できなかった部分があった。しかし，彼は交渉を決裂させないために，クロアチア州の最終的な範囲は今後の国家全体の再編の過程で確定することで妥協した。クロアチア州の権限に関しても，財政上の独立性や憲兵の指揮権，独自の防衛隊の創設など多くの問題を詰め切れていなかった。これらの欠陥はウスタシの側に格好の攻撃材料を提供し，彼らの宣伝活動は人びとの混乱や不安を助長した。クロアチア州の総督に摂政パヴレの信任の厚いシュバシッチが就任し，クロアチアの過激派分子を取り締まるための収容所を創設したことも人びとを驚かせた。こうしたことから８月26日協定の締結後，クロアチアにおけるマチェックの人気は下降を始めた。

摂政パヴレがマチェックに譲歩をおこなったのは，クロアチア人の政治的忠誠を確保し，この国の結束を固めるためであった。しかし，８月26日協定はクロアチア農民党を政権側に取り込むことはできたが，クロアチア人の間での同党の支持率を弱め，かえって分離主義勢力の影響力の拡大を招いた。さらに深刻な問題は，８月26日協定がパヴレのお膝元のセルビアで大きな反発を招き，大セルビア的な国家単位を要求する運動が高まっていたことである。スロヴェニア人やムスリム人もクロアチア人と同等の権利を要求する構えでいた。クロアチア人，セルビア人，ムスリム人の領土要求は相互に重なり合う部分があり，その調停には大きな困難が予想された。ユーゴスラヴィアの国家構造の再編が最終的にどのような形に落ち着くのかはまったく不透明な状況となった。いずれにせよ，枢軸国にとってこのように求心力を弱めた国家を瓦解させることは困難なことではなかった。

注

1　Ivo Goldstein, Croatia: A History, London, Hurst, 1999, p.129.

2　パヴレは，ベオグラード駐在アメリカ大使のレーンに対して，クロアチア問題の困難はマチェック個人にあると述べて，彼との交渉の難しさを嘆いていた。それによれば，マチェックは一定の状況下で同意し，パヴレもこれを確約していたのに，次の交渉ではこれを翻してしまう。このような性格の人物との交渉には無尽蔵の精神力が必要とされる。亡くなった国王アレクサンダルなら到底我慢できず，マチェックと１時間も話しをすれば癇癪を起こして彼を部屋から追い出してしまうだろう。自分の場合には５時間話して成果なしに終わることも容赦しなければならない。自分は協定を成立させるためできる限りのことをするつもりだが，マチェックのような人物との話し合いからどれだけの成果が期待できるのかは何ともいえない（Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 2, Liber, Zagreb, 1974, p.30）。

3　Ljubo Boban, Sporazum Cvetković-Maček, Institut društvenih nauka, Beograd Boban, p.140.

4　Ibid., p.140, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.31.

5　Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.141, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.31.

6　ヨヴァノヴィッチの備忘録によると，シューテイと野党連合代表の会合が開かれた同じ日に農業者党党首のヨヴァノヴィッチはパヴレに謁見した。この会談でパヴレは，ツヴェトコヴィッチをセルビア人代表と見ることはできないというマチェックのメッセージを紹介した。どうしたものかと述べるパヴレに対して，ツヴェツコヴィッチの派遣を取りやめ，

すべてを野党連合に任せて頂きたいとヨヴァノヴィッチは進言した。自分はどうすればよいのかとパヴレが述べたところ，閣下は調停者として脇で見守っていただきたいとヨヴァノヴィッチは答えた。そうすれば全責任はマチェックと野党連合が引き受けることになり，パヴレにとって負担が軽くなるとヨヴァノヴィッチは勧めた。もっとも，パヴレはそのような解決策をマチェックが受け入れるか疑っている様子であったという（ibid., p.32）。

7 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.142, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.32. トゥーパニャニンが派遣されたのは，彼がボスニア・ヘルツェゴヴィナの事情に詳しいと考えられたからであった。クラマーは元独立民主党の幹部であった。彼は国王独裁体制の初期にプリビーチェヴィッチの路線に反対して同党を離党して政権側に参加し，その後ユーゴスラヴィア国民党の幹部になっていた。

8 クラマーはスロヴェニアのリュブリャーナから到着し，まずヴィルダーおよびコサノヴィッチと会い，そのあとトゥーパニャニンと合流し，マチェックと会った。

9 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.142-143, Maček i politika HSS 1928-1941 2, pp.32-33. ヨヴァノヴィッチの備忘録によると，トゥーパニャニンはマチェックに対してこう釘を刺した。「このような問題解決の手続きはあり得ないはずだ。我々とあなた方の間には協定がある。我々は現時点では正当なセルビア人代表ではない。したがって，まず自由選挙を実施してセルビア人代表を選出し，そのあと初めて管轄地域の問題の議論が始まるはずだ」。これに対してマチェックはその通りだと答えた（Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.66）。

10 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.143-144, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.33. この会合では，ツヴェトコヴィッチがザグレブを去ってから野党連合の代表がザグレブを訪問するという意見が提出された。しかし，代表団の派遣には，急進党，民主党，ユーゴスラヴィア国民党は反対であり，農業者党だけが賛成であった。しかし，その農業者党も管轄地域の問題を議論しないという前提での賛成であった。代表団の派遣に対する反対の理由は，パヴレの仕事の妨げにならないように，また野党連合が彼の仕事をぶち壊したと見なされないようにするためであった。

11 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.144, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.34.

12 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.144-145, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.34.

13 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.146, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.35.

14 4月1日にマチェックと会談した農業者党幹部のトゥーパニャニンはこのあともザグレブに留まり，マチェックとツヴェトコヴィッチとの会談の行方を見守っていた。ツヴェトコヴィッチが去ったあとトゥーパニャニンは直ちにマチェックに会い，こう警告した。「パヴレ公との話し合いで境界線を引くことは許されない。そのためには，セルビア人民の意見を聞かなければならない。マチェックが地理的な要因を根拠に境界線を提案するならば，セルビア人民も民族的な要因を根拠に境界線を提起しなければならない」（Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.148, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.67）。

15 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.148, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.36.

16 とくに懸念されたのは，ユーゴスラヴィア国内におけるアルバニア人の分離主義運動をイタリアが刺激するのではないかということであった。

17 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.146-147.

18 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.148-149, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.36. ヨヴァノヴィッチはこの会合で次のような見解を述べた。「政府が我々の見地に沿って話し合いを進めている限り我々はその仕事を妨害しないが，もし政府が道を踏み外し，我々の見地に反するような方向に進んだ場合には断固たる反対の姿勢をとる」。ヨヴァノヴィッチのいう見地は1937年10月8日の協定であるが，彼によれば，マチェックはこの協定から離れて交渉を進めていた。「したがって，我々はマチェックにこの協定の見地に戻るように注意するが，交渉の中止を求めたり，これを妨害したりすることはできない。なぜなら，国内外の情勢は協定の締結を求めているからだ。我々は，セルビア人民が承認できるような協定が結ばれることを求める」。しかし，ヨヴァノヴィッチは，マチェックがパヴレ公との協議の中でおこなっているクロアチア問題の解決の仕方はセルビア問題を提起してしまうと強調した。彼はこう述べた。「我々はできる限りマチェックが道を踏み外さないように働きかけるが，セルビア人とクロアチア人の関係を緊張させるようなことは避けなければならない」。彼はもし具体的に要請があれば，野党連合は話し合いの中に参加すべきだと述べた。「このような形で協議が続けば，責任はパヴレ公に帰せられることになる。彼はクロアチアの管轄地域の問題についてマチェックと交渉を始めたからだ。ツヴェトコヴィッチも同罪である」。

19 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.150, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.37.

20 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.150-151, Maček i politika HSS 1928-1941 2, pp.37-38.

21 この案は3月26日にヨヴァノヴィッチがパヴレに提案し，事実上却下されていた。

22 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.151, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.38. 彼らがとろうとした行動は，ヨヴァノヴィッチによれば次のようなものであった。「マチェックとツヴェトコヴィッチに交渉の責任をすべて負わせ，そのあとでセルビア人民の側に立って守るべきものを守り，非難すべきものは非難する」。

23 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.152, Maček i politika HSS 1928-1941 2, pp.38-39.

24 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.152-153, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.39.

25 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.159, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.44.

26 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.159-160, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.44.

27 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.160-162, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.45-46.

28 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.163, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.47.

29 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.163-164, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.47-48.

30 独立民主党幹部のクリズマンの日誌（4月28日付）によると，クロアチア側の閣僚候補者はベオグラードへの旅支度を終えていたという（ibid., p.165）。

31 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.165, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.48-49.

32 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.166-167, Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.49-50.

33 Maček i politika HSS 1928-1941 2, p.50.

34 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.167.

35 カルネルーティがチアーノと会うのはこれが初めてではなかった。チアーノの回想録と1945年にユーゴスラヴィアの人民政府がカルネルーティに対しておこなった訊問の記録によって，1938年11月初旬にチアーノはカルネルーティの訪問を受け入れていたことが明らかになっている。このときマチェックはカルネルーティを通して，クロアチア農民党の運動にイタリアの支援を得たいと打診していた。（Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.438-441）。

36 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, pp.112-113.

37 Ibid., p.113. なおその回想録の中でマチェックはこの接触について，チアーノの側から先に働きかけがあったと記している。それによれば，1939年3月，カルネルーティがマチェックを訪ね，今度ローマのチアーノのもとへ行くので必要があればお役に立ちたいと述べた。そこでマチェックは，1939年1月にチアーノがユーゴスラヴィアを訪問した際にストヤディノヴィッチとの間で何か密約があったのかを探ってほしいと頼んだという。しかし，カルネルーティは，第二次世界大戦後にユーゴスラヴィアの人民政府に対する証言では，彼はマチェックから依頼され，メッセージを携えてチアーノのもとへ行ったと明確に述べていた。こうした状況からボバンは，この接触のイニシアチブをとったのはやはりマチェックであり，チアーノが記したような提案をおこなっていたに違いないと述べている（ibid., p.114）。

38 ベルリンからの指示を受けてドイツ大使のフォン・マケンゼンは1939年3月20日にチアーノに会った。フォン・マケンゼンは，クロアチア問題に対するドイツの介入の噂を否定し，ドイツはイタリアの権益圏と見なされる地中海方面には領土野心はないと強調した。チアーノはドイツ大使にこう述べた。イタリアはユーゴスラヴィアの現状維持を望んでいる。しかし，もし内政上の危機が起こり，自治をめざすクロアチア人の運動がチェコスロヴァキアのような事態を引き起こしたとしたら，チェコスロヴァキアの場合にイタリアがとったようにドイツがこの問題に関心を示さないことを期待する。これに対して，フォン・マケンゼンは，それはまさにドイツの考え方だと返答した（ibid., p.110）。

39 Ferdo Čulinović, Jugoslavia između dva rata 2, Izdavački zavod Jugoslavenske Akademije Znanosti i Umjetnosti, Zagreb, 1961, pp.140-141, Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.171.

40 Ibid., p.179.

41 Ibid., p.188.

42 Ibid., pp.188-189.

43 Ibid., pp.189-190.

44 Ibid., p.189.

45 もっとも，これには拡大解釈だという批判が後に提出された。憲法第116条は戦争や内乱などによって国家の秩序と安全が脅かされているような場合を想定しており，この協定が合意された時点にはそのような状況は存在しないと批判者は主張した。これに対する政府側の反論は，憲法116条は「もしくは公共の秩序が脅かされているとき」とも述べており，そもそもどのような事態を危急時と見なすかは国王の判断に委ねられていると主張した。実際，クロアチア問題はこのまま放置すれば国家の秩序や安全を危機に追い込むような危険性をもつ問題であった。したがって，国王権限の代行者である摂政パヴレはそのように判断して「クロアチア州に関する規定」を承認した。この点でこの規定は法的な形式性と政治的な正当性を満たしているといえた。ちなみに1939年8月26日に公布された勅令はすべて憲法第116条に基づくことが述べられてあった。

恐らく憲法第116条の適用がふさわしくないと思われるのは第一にこの規定があくまで緊急避難的に暫定措置を導入することを想定していたことであ

る。ところが，クロアチア州の設置は一時的な措置ではなく，恒久的な措置であった。もっとも，第116条にはこの暫定措置をどれだけの期間続けることができるのかは明示していなかった。しかし，それは事後的に議会の承認を得なければならないと述べていた。ところが，「クロアチア州に関する規定」の公布と同時に上院も国民議会も解散された。これはマチェックとツヴェトコヴィッチが現行の議会には抵抗勢力が多く，承認を求めることはできないと考えていたからである。しかし，通常は議会の解散は総選挙の告示とワンセットで公布されるが，選挙の告示はいっさいなく，その後においても実施されなかった。したがって，「クロアチア州に関する規定」は議会での承認がない暫定措置という性格を払拭できなかった。この点に第二の問題点があった。

46 セルビアの政治家が当初パヴレを軽視していた証拠として，ストヤディノヴィチは次のようなエピソードを紹介している。彼の回顧録によると，国王アレクサンダルが暗殺された当時，その遺言書の存在は知られていなかった。そのため，当時の首相のウズノヴィッチはパヴレを官邸に呼びつけて摂政団の問題を協議しようとした。ウズノヴィッチから見れば自分の地位の方が上に見えたためである。パヴレは首相の態度に怒った。ストヤディノヴィッチは機転を利かしてジフコヴィッチ将軍を呼び，彼が指揮する近衛師団を宮廷に集結させた。その上でウズノヴィッチに電話をかけ，遺言書の存在を告げて宮廷に来るように伝えた。これを聞いたウズノヴィッチはあわてて宮廷に参上した（Milan Stojadinović, Ni rat ni pakt, NIP, Beograd, 2002, p.314）。

47 Boban, Sporazum Cvetković-Maček, p.220.

48 Ibid., pp.221-223.

49 Ibid., pp.226-227.

50 Ibid., p.232.

51 Ibid., pp.239-240.

52 Ibid., pp.233-234.

53 Ibid., p.234.

54 Ibid., pp.243-245.

55 Ibid., p.247.

56 Ibid., pp249-253.

57 1940年２月，ブーダクの主宰する機関紙『クロアチア人』は発禁処分になり，ブーダク，ブーチらフランク派の指導者が逮捕された。しかし，彼らはまもなく釈放された。